

第四回 教文研教育シンポジウム記録

# 神奈川の入試制度を問う

—— 中学の進路指導と高校の序列をめぐって ——



神奈川県教育文化研究所



シンポジスト

・加藤 孝紀

(横浜市立青葉台中学校教諭)

・中野 和巳

(神奈川県立田奈高等学校教諭)

・黒沢 唯昭

(神奈川県立田奈高等学校教諭)

・渡邊 宏子

(高校一年生の保護者・横浜在住)

コーディネーター

・浅井 良雄

(横須賀市立大津中学校教諭)

1993年10月23日(土)

於：横浜市教育会館

## あ い さ つ り

○司会 定刻を五分程過ぎましたので、これより、神奈川県教育文化研究所の第四回教育シンポジウムを開催させていただきます。私は、全体の司会を努める事務局長の谷口と申します。よろしくお願ひします

当研究所では「不登校」と「高校入試制度」を二本の柱として、県内でシンポジウムを継続的に開催してきました。前回は、二月に神奈川の入試制度をめぐるシンポジウムを逗子で開催しました。今回は、本来ですと「不登校」をテーマとしたシンポジウムになるのですが、皆様ご存じの通り、神奈川の入試制度をめぐる論議が高まっている時期ですので、「神奈川の入試制度を問う」と題したシンポジウムを開催することとなりました。会場の皆様からの、多くのご意見をお聞きしたいと思いません。

それでは、まず、当研究所の倉持所長が皆様にごあいさついたします。



○神奈川県教育文化研究所 倉持巳佐男所長 第4回教文研教育シンポジウムを、ここにも掲げてありますような「神奈川の入試制度を問う」というタイトルで開催することになりました。

高校教育改革問題をめぐりましては、制度、あり方、内容等にわたって、国の構想、地方の施策、個々の学校での実践、あるいは教職員団体の提言等々、次々と打出され、取り組みが進められています。

いろいろな課題はあると思いますが、私は、その中の大きな柱として「多様化問題」があると思います。そしてその底流には、あるいは根底には入試制度に端的に見られますように、選択の自由と平等の問題が葛藤しながら横たわっていると考えられます。

高校教育改革問題につきましては、当教文研といたしましては、教育改革検討委員会の中でずっと論議を重ねてまいりましたが、今年の春以降、委員会内に高校改革問題作業部会を設置いたしました。文字どおり精力的に、ときには夜を徹して研究、検討、論議を重ねてきたところでございます。その中間報告がまとまりまして、きょう、会場の受付でお渡しした「教文研だより」六十五号がそれでございます。後できょうのシンポジウムの反芻をしながら、ぜひお読みいただきたいと考えるわけです。

そして、この中間報告に関して、あるいはそれ以外でも結構でございますが、いろいろご意見等がございますれば、県教文研の方にお寄せいただければ幸いですと考えております。

きょうのシンポジストの黒沢先生、加藤先生、中野先生、あるいはコーディネーターでございます浅井先生は、いずれもこの作業部会の有力なメンバーでございます。中間報告についてもご執筆を願っておるところでございます。本日のシンポジストは、今申し上げました先生方、さらに高校生を持つお母さんであります渡邊さんを加えまして、それぞれのお立場、実践から、あるいは抱負の中から、タイトルに示した問題についていろいろお話をいただけたと思います。そのお話を素材としてご参会の皆様の活発な意見の交流をいたしまして、きょうのシンポジウムが実り多い会になりますように心から念願をいたしました。ごあいさつにかえます。

ありがとうございます。(拍手)

○司会 続きまして、本日のシンポジウムに共催をいただいております横浜市教育文化研究所の小畑義

夫所長からごあいさつをいただきましたと思います。

○小畑所長　ご紹介がありましたように、県教文研が主催、横浜市教文研は共催という形で、きょうのシンポジウムが開催されることに相なりました。本当にお忙しいところを多数ご参集いただきまして、ありがとうございます。

私も横浜市教育文化研究所は、この問題についてことしの三月に「JAN」という教育誌の中で特集をいたしました。その中で私も横浜国大の平出先生とお話をしました。原稿もいただきました。今の進路指導はいつたいどうなんだという視点からお述べになっておりましたし、お会いしてお話を聞きますと、今はどうも入試指導だけではないのか。進路指導というのは人生指導ではないか。その子どもの適性、能力、希望、その他を勘案して将来にわたっての一つの道筋を指導してあげることが主体であったのかかわらず、今は入試指導に陥っているのではないかというお話がございました。私ももつともだなと考えたわけでございます。



それから、一般の保護者の方々にお集まり願って、匿名だから言いたいことを言ってごらんささいという座談会をやりました。一人一人みんなお子様が違いますので、その経験談からお話をなさっております。えてして公立の先生方は不親切だ。塾の方は夜の夜中でも電話をかけて「どこの学校にしたらいいか」と。公立の先生方は資料を隠しちゃって「あなたはここだ」と決めてしまうというようないろんな問題がありました。中二のア・テスト、これはア・テストのために毎日毎日勉強させられる。こういうことかえって受験をおおっているのではなからうか。

いろんな話がありまして、本音で言っておりましたので、そのまま伝えますけれども、「最終的にいったいどういう方式がいいんでしょね」という私どもの質問に対して、「最終的にはわからない。た

だ、神奈川方式は親切すぎるのではないか」「中学在学中にほとんど決まってしまう。親切すぎるのではないか」「一発勝負でもないのではないか」という厳しいお話もございました。

実は、私も昭和二十五年から中学をかつて担当しておりましたので、この選抜方式については身をもって体験してきたわけです。その当時は、小学区制でございましたから学校の指導要録だけで選抜されておりました。そのうちにア・テストが加わってきた。公平といえますか、厳正な採点方式と。いろいろ変遷をして四十年の間に今日のような一つのシステムが構築されたわけです。私ども古い教員にとりますと、随分変わったなということと同時に、当時の進学率の四十五%、五十%が今や九十五%という数字でございますので、やむを得ないとは思いますが、非常に社会問題になる。いつも古くて新しい問題として、この問題が提起されているのではなからうかと思えます。

本日は、シンポジストの方々がそれぞれいろいろ本音でお話しになると思うし、理想もあるだろうし、現実はどうなのかという問題もございましょうが、ぜひご参会の皆様方に本音でお話し合いをしていただければ、あしたの曙光と申しますか、明るさが照り輝くのではなからうかということ強く期待いたしました。共催の立場でございさつを申し上げます。

どうもありがとうございます。(拍手)

## シンポジウム

○司会 それでは、シンポジウムのほうに入りたいと思います。

ここから後の進行については、本研究所の教育改革研究委員会の研究委員でもあります大津中学の

浅井さんをお願いしてありますので、よろしくお願ひしたいと思います。



○浅井(コーデイナー) たいま司会の方よりご紹介をいただきました横須賀市立大津中学校の浅井と申します。

本日はコーデイナーということでですが、最近、横文字がはやっておりまして、私自身はその意味をよく解せませんので、「司会」というようなつもりで進させていただきます。よろしくお願ひいたします。

最初に、シンポジストの方々を簡単にご紹介をして、順にお一人十五分ぐらいのところまで、現在ご自分が考えていられること、日ごろ思っていること等をお一人ずつお話しただけだと思っております。その後、五分程度休憩をとらせていただきまして、その後の再開では会場の方々よりご質問なり、ご意見をいただきながら、シンポジストの方々と会場の中との討論もできればと思っております。終了予定時間は一応四時半から四時四十分ぐらいと考えておりますが、討論が若干延びることもございますので、ご了解をいただければと思います。

では、早速、シンポジストの方々をご紹介します。

初めに、横浜市立の青葉台中学校の教諭でいらつしやいます加藤孝紀さんです。

続きまして、神奈川県立田奈高等学校の教諭でいらつしやいます中野和巳さんです。続きまして、現在、お二人のお子さんをお持ちですが、下の方が高校一年に在学していると聞いております。横浜市にお住まいの渡邊宏子さんです。

最後に、神奈川大学の教授でいらつしやいます黒沢惟昭さんです。

以上、私の方からは詳しいシンポジウムについての説明はさせていただきますが、結構だと思ひます。もう既に司会の方のほうから趣旨等も十分お話をいただきましたので、早速、シンポジストの方から

のご提起、お話を伺えればと思います。

では、まず最初に、加藤孝紀さんのほうからよろしくお願いいたします。

○加藤（青葉台中教諭） 皆さん、こんにちは。青葉台中学という緑区にありますが、まず最初に、加藤孝紀さんのほうからよろしくお願いいたします。青葉台中学という緑区にありますが、今一年生の担任をしております加藤と申します。ひとつよろしくお願いたします。

「おまえ、十五分だぞ」ということで時間の制限がありますので、話があつちやつちちに飛ぶ場合もあります。その辺はご勘弁ください。

一応二つの柱を考えております。

一つは、後ろの看板にもありますが「中学の進路指導」という立場から、私は、担任をします前に進路指導のいわゆる主任という形、我々は進路指導代表と申していますが、その実務担当を過去三年間やりまして、ことしは担任をしています。そういう中で中学が抱えている進路指導の話を、保護者の皆さんもご出席だそうなので、その辺のところを考えながらお話をしたいと思っております。

二つ目の柱は、あくまでも私の考えで、私見であります。最近問われている入試制度、とりわけ「神奈川」ということなんですけれども、その辺にかかわることもお話をしていきたいなと思っております。

まず、私の所属している職場は緑区というところにございます。横浜市緑区という住所なんですけれども、親御さん、いわゆる保護者の方も、生徒も東京志向が強い。田園都市線を抱えておりますので、非常に東京に通動しやすい。そういう中で横浜市民というよりも「横浜都民」という意識の方が多いのではなからうか。

私は、今勤めている職場で一番古くなつてしまいました。丸九年になつておるのですけれども、そ



の辺の中で、実は我々が考えている「進路指導」というものが実際現場では「進学指導」になっている。とりわけ三年生になりまして、私達は、「○○高校」とか、「○○会社」という形で主に出口の指導になってしまいがちである。現状はそのような形なのです。

私達が考えているのは、すべての保護者や、あるいは子どもたちに「ゆきとどいた進路保障を」ということをモットーに指導しておるのですけれども、現実にはさまざまな弊害や問題が出てきている。それはマスコミ、とりわけ新聞やテレビ等で、先生方、あるいは皆様もご存知の通りだと思います。

現実には私たちのやっていることが進路先のあっせんという形になってしまいがちである。何々高校だとか、何とか会社だとか、何とか専修学校だとか等々の形になっている。私たちの考えているのは、子供達が将来の人生を考えながら、そして自分の進路決定ができるような進路指導。先ほど横浜教文研の方のごあいさつがありました。が、正しくはそうなんですけれども、現実にはなかなかそこまではいかない。中学校によっては一年生から三年間を見通した進路指導という形で、人生設計の中の位置づけという形でやられている学校さんもあるのですが、なかなか現実の中学校はそうはまいらないというのが本音の話でございます。

ただ、私たちが気をつけてまいりたいのは、後で高校の先生からお話があるのですけれども、今の「神奈川方式」というのが、後ろの大きな看板に掲げられている「神奈川の入試制度を問う」という言葉の中で、なんだか神奈川が今までやってきたことが非常に今問題が多いという感じで受け止められそうですが、そうではなく、あくまでも神奈川県がやってきました——確かにいろいろな問題が産出しているのは事実でございますが、しかし、現実にはやってきたことが今どうなのかという話をちょっといたしたいと思います。

実は、今、新聞紙上で騒がれていますア・テストの問題も含めてなんですけれども、ア・テストを

なくす、あるいはなくさない、存続して選抜資料には入れない等々のことが騒がれています。ただ、ア・テストの存在意義は、私としては必要であるということをまず申し上げたいと思います。少なくとも四十七都道府県がございまして、「神奈川方式」ということでやっている独自の方法は神奈川県だけでありまして、これには確かに問題点はございました。

例えば保護者の方からの「二年生で選抜資料にするのは早いのではないか」等々のご意見でございます。間違ったらごめんなさい。一九五〇年にア・テストを実施しまして、一九五三年にア・テストを入試の選抜資料にすると。なぜ私がよく覚えてるかといいますと、私の生まれた年が一九五三年ですので、年がばれちゃいますけれども、非常に印象深いです。したがって、四十年間継続し、現在に至っているわけです。そのおかげもあって、今、騒がれている偏差値教育に見られる業者テストは少なくとも介入しなかったという事実がございます。

それから、私たちの合言葉に「十五歳の春を泣かせるな」ということがあります。文部省はこの間、テレビでもごらんになった方がいらつしやると思いますが、「十五歳の春は泣かせてもいいんだ。」「もっと受けたい学校を受けさせてどんどん泣かしてもいいんだ。」「泣かせないからさまざま問題が起きてくる。」「また、例えば無目的の入学とか、不本意入学とか、十二万を越えると言われる中途退学者の問題等々で、だから、中学校側は、俗に言う「輪切り」ではなくて、どんどん受けさせろと。しかし、ここには最大の問題がありまして、現実に泣いている子どもたち、あるいは泣いている親御さんの気持ちはどうなのかということは一言もありません。とにかく泣かせてもいいんだと。

私がここでお話をしたのは、十五歳では泣かせてはいけません。もう一度お話をしますが、十五歳で泣かせてはいけないんだということを前提に、私の考えでは、中学校としてそういうことを合言葉に頑張っているわけです。決して俗に言う「輪切り」では——非常に難しいんですけど——

ありません。「おまえ、輪切りじゃないか」と言われてしまえば、そうかもわかりませんが、ただ、私もがやっている進路指導は、進路の選択権を持っているのはあくまでも子どもであり、あるいはその親御さんであるということです。

私たちは、三年生になりまして、かなり中学校の先生もお見えなのでおわかりの通り三者面談等を行いました。その中で最終的に決定をするのは本人であり、親御さん（保護者）なのです。ただ、私たちが親御さんや子どもたちから「先生、何々高校はどうでしょうか」と聞かれたときに、例えばうちの中学ですと、「青葉台中の過去のデータを見る限り合格の可能性は非常に厳しいですよ。」とか、「合格の可能性はかなりありますよ。」とか、そういう話をする中で、最終的に選択（チョイス）するのは親御さんであり、本人である。とりわけ本人を中心とした親御さんである。したがって、決して我々が「君はここしか学校がないんだよ」とか、「ここにしろ」という指導はいたしておりません。

ただ、卒業生の中で、うちの中学ではないんですけど、こういうふうな場でよく聞く話では、「何々先生に行けと言われて行かされた」とか、「親が行けと言ったから行った」とか、あるいは「みんなが行くから行った」、いわゆる俗に言う無目的の入学とか、不本意入学という言葉に代表されるような指導は我々どもはしておらないつもりです。「おまえ、それは本音か」とおっしゃるかもわかりませんが、そのご意見は後でお聞きしたいと思います。あくまでも選択権、あるいは選択を最終的にするのは子どもであり、そして親御さんであるということをちょっと押さえておきたいと思えます。

と同時に、うちの学区（横浜緑区）に絞ってしまっていますが、公立高校は八つございます。確かに序列化された、いわゆるランキングされた高校になっております。これは歴然とした事実です。例えばあそこの高校は難しい。ここの高校は易しい。易しいというのは入りやすい。そして「課題集中校」という言葉に象徴される学校も現存しております。ただ、私たちの指導する中で、「公立高校を一つ下

げて、〇〇君、ここを受けてみてはどうか」とか、そういうふうな指導は一言もいたしてありません。話を聞くと、そういう話もあるやに聞きます。私たちとしては、高校の位置づけにつながりますので、そういうふうな形の指導はいたしておりません。

それから、話が飛んで申しわけないんですが、時間が限られていてあせておるのですが、最近、「学校選択の自由化」という言葉がよくうたわれております。今、壇上に立って話しておりますので、記憶が間違っていたらごめんなさい。一九八六年だと思えますが、中曽根内閣当時の「臨教審」ですね、その中の「学校選択の自由」、いわゆる「学校選択の自由化路線」というのがございまして、その一環で、「いいじゃないか、どこでも受けるのは」「いいじゃないか、受けさせれば」という文部省の発言があると思うのです。私は、横浜市の教職員組合に所属しております、進路指導推進委員会に入っております。今から数年前に進路の主任と言われる実務担当者にアンケートをとったことがあるんです。その中にも現実がありました。「いいじゃないか、受けさせるのは」「ア・テストの点をなくしてどんどん受けさせろ」というご意見もありました。本音の話です。ただ、問題なのは、「学校選択の自由」というのは、一部の生徒の自由でしかないということです。大多数の生徒はそのいわゆる自由の名の下の恩恵をこうむらない。大多数の生徒は泣くんだということです。つまり、「自由」という言葉の幻想なのです。

じゃ、具体的にどうかというと、三年生になると十段階の形で成績を処理いたします。その十段階の中の十や九や八をとっている子どもたちは、学区を拡大し大学区にしていくと確かに自由なんです。確かに受けるチョイスはたくさんあるわけです。大多数の子どもはそうじゃないんです。ところが、親御さんも、本人もその幻想に抱かれています。「いいじゃないか、自由だったら」「学校の先生はここは合格の可能性は厳しいと言うけれど、何で受けられないんだらう。いいじゃないか、どんどん受

けさせてくれれば」という話もあります。決してそうではなくて「学校選択の自由」という言葉は、いかにも「自由」という言葉でいいように見えますが、これはあくまで一部の自由にしかならないということであります。

もう一つは、「多様性の問題」ということがあります。「多様性の問題」という言葉は非常に言葉はきれいなんです。「多様性、いいじゃないか、いろいろな高校づくりで」。でも、この言葉も裏を返せば、実は「多様性」は新しい序列や格差を生み出すということです。

ちよつとかたくなつて申しわけないんですが、時間が大分たつてきましたので、私の考えとしては、公立高校は特色があつてはいけないんだということです。なぜかというと、保護者も、その高校に通う子どもたちも、どこの地域にいても、どこの高校に行っても同じサービスを享受できるんだということを前提に公立高校はあるべきだということで、将来的には学区を縮小して、最終的には地元の学校を育てる。地元の学校に行つていいんだという気持ちを持たせるような小学区制へとなげていきたい。ひよつとしたら「おまえ、そんなのは理想だ」と言うかもわかりませんが、少なくともそういう運動が確実に一歩一歩進むことは必要だなと私は思います。

ちよつと時間の関係で、もう少し言いたかったのですが——私もちよつとメモをさせていただいたんですが、偏差値の問題が出ていました。偏差値教育、あるいは業者テストの介入許すまじという形で、文部省が非常に正義の味方、ヒーローのような形で新聞に出ていました。ところが、その反面今はどうかという、新たな、また新しいそれにかわるものが出てまいりました。最近の「朝日新聞」によると今度は新たな公立の中学校のランクをつけて、Aランク、Bランク、Cランク、Dランク、Eランクという序列をつけながら入試の資料とするとか、あるいは我々中学は高校に対して進路の相談とか、学校によっては教育相談と申しますが、高校に外向きます。そのときにいろいろなお話をい

たします。その資料として偏差値を使うな等々がございますね。東京都あたり、周りもそうです。最近どうなったかという、今度新たに校内の序列をつくれと。一番からずつと番号をつけて、A君は何番に当たるんだという中で出させようとする。正しくこれは何が問題かという、そもそも入試制度の根本である偏差値ではなくて、もっと大切な何かが欠けているのではないか。それは正しく文部省が今までやってきた教育行政なり、教育体系とか、教育制度それを抜本的に変えていかない限り、そういう小手先のものだけ、形づらだけやっても何ら変化はしない。新たな資料や、新たな格差、新たな序列が生まれる。これをちよつと皆様にご承知おき願いたいと思います。

ちよつと話が飛んで申しわけないんですが、時間の関係で、またございましたら、よろしく申し上げます。

以上です。

○浅井 ありがとうございます。

加藤さんからは、中学校の立場からということで、今の「神奈川方式」の中で、かなり関心が集まっていますア・テストについて、加藤さん自身は必要である。このア・テストを神奈川でおこなってきたことよつて業者テストを介入させてこなかったし、「十五の春を泣かせない」ということができたとよつてお話がありました。

もう一つは、臨教審答申とも絡んで、「学校選択の自由」が叫ばれているけれども、その選択の自由は一部の者にしか与えられていない自由である。

それから「多様化」ということも言われているけれども、公立高校はどの高校も同じであつてよい。むしろ特色がなくても、どの子どもも同じサービスが受けられる、そういう公立高校であつてよい。

最後に、偏差値追放について文部省から言われているけれども、小手先の改革ではないかというお

話がなされました。

次に、子どもたちを受けとめて、今、高校現場で働いております中野さんのほうからお話をしていただけだと思います。中野さん、よろしくお願いいたします。

○中野（田奈高教諭） 田奈高校の中野と申します。

非常に偶然なんですけれども、お隣に座っていらっしゃる加藤先生とは学校が同じ緑区内ということですし、先ほど一九五三年生まれとおっしゃいましたが、私と同じ年だということに今気づきました。



田奈高校は、青葉台中学から歩くと十五分ぐらい、バスだと五分もかからないところにある学校です。先ほど加藤さんが緑区とはどういう土地柄かみたいなことをおっしゃいましたので、私はそこら辺のことは省略しまして、「高校の格差と序列」の問題について一つ焦点をしばって、その「格差と序列」もうちよつとわかりやすく言うと、「格差と序列」の最底辺部に置かれている高校というのがどういふ実態を持っているか。そこら辺を赤裸々にお話をしながら、問題点が何であるかを話してみたいと思います。

私は、田奈高校に赴任しまして、ことしで六年目で、最初からずっと生徒指導部ということでやっています。去年からは主任という仕事まで仰せつかって、主任制度の絡みで言えば、全く主任制が機能しているような学校にいます。そういう中で日夜というか、四六時中というか、いろいろと問題を抱えた生徒とかかわっています。近ごろは警察署へ足繁く通うようになったので、例えば緑北署とか、緑署へ行くと、顔パスで通ってしまうような、教師をやっているのか何をやっているのかかわらないような仕事が多い職場です。

まず最初に、少し個人的な話になりますけれども、二つほど話をさせていたきたいと思います。

私には、小学校に通っている娘が二人いますが、たまたまきょうは授業参観日ということで、最初の三十分ぐらい両方の娘の様子を見てからここに来ました。小学校というのは、私が勤めている高校の現場からすると、非常にすばらしいなという感じで、やっぱり小学校の教師のほうがよかったかななどとちらっと考えたりしましたけれども、いわば地域に根ざしている、地域の子どもたちが集まっている、そういう意味ではどこどこ小学校へ行くことは最初から決まっているような、学区がしかれているわけですけれども、そういう中で小学校は多分一番問題が少ないんだらうと思えるような雰囲気がありました。

ただ、いろいろ聞いてみますと、結構私の娘は学校のことをいろいろしゃべってくれますので、やはり塾通いが非常に激しいということを感じます。「お父さん、クラスで通っていないのは誰さんと誰さんで、自分も含めて何人かしかいない。」上の子は五年生ですけれども、「みんな何かやっている。塾へ行かせてくれ」とか何とかいうことで、結構親子でやり合ったりするんです。そういう意味では小学校の高学年において、学校以外のところで勉強を教わったり、いろんなことをやるのが常態化しているということで、私のようにたまに行って見る人間からは、どちらかというと平和に見えるような小学校も、実は、例えば塾で先々習っていて先生のやる授業は退屈で、そういう子どもたちは授業を邪魔するんだとかみたいなのを娘がポロツと言ったりするような現実があります。

中学に行けば、さらにこれはもっと激しくなっていると思いますけれども、こういう状況をここにいらっしやる皆さんも、いわば是認されているというか、当たり前的事实として受けとめていらっしやる方は余りいらっしやらないんじゃないかと思えます。私もその一人ですけれども、しかし、現実にはそういうことが存在する。

それともう一つ、今年度、田奈高校で起きた入試の状況についてちょっとお話をしてみたいと思い



ます。

先ほど加藤さんのほうから紹介がありましたように、横浜北部学区には高校が八校あります。八校の中では学力的に底辺部に位置している学校ではないかと思つています。いろいろな言い方がありますが、これも、「底辺校」とか、括弧つきの「教育困難校」、文部省は「指導困難校」とか言っていますけれども、いろいろな呼び方があります。神奈川では今は組合を中心に「課題集中校」という呼び方をしていきます。これはその学校に解決されなければならない課題が集中して存在する。そういう実態をとらえて「課題集中校」という呼び方をしていますけれども、田奈高校はその「課題集中校」の一つだと思えます。

ところで「課題集中校」は定員割れを起こさないというのが今までの常識だったんです。「進学校」みたいなところが、特に横浜北部学区あたりは定員割れを起こすということでした。ことは三十名を越える定員割れが起きました。ということ、志願者が当然定員より下回っているわけですから、どうするかという議論になりました。つまり、入学定員の考えからいけば全員合格です。しかし、いろいろ中身を見てみると、それぞれに問題を抱えた生徒もいます。例えば中学校の出席状況が五十%ぐらい、三年生では一日も登校していないという生徒もいます。あるいはその地区では勇名をさせている生徒も何人かいて、生徒指導をやっている関係上いろいろ情報があつて、中学校の先生も指導に手を焼いた生徒がたくさん集まってきました。

そういう意味で、さてこれを入れるか入れないかという激しい議論が入試の合否判定会議で聞かされて、結局全部入れました。そして二次募集をやりました。二次募集には我々は予想もしなかったんですけれども、四〇〇名を超える志願者が集まってきました。これは全県からです。横浜市内はもちろんですけれども、遠いところでは湯河原というのがありました。あるいは相模原、厚木、川崎のず

つと離れたところ、いろんなどころから四〇〇名を超える受験者が集まった。多分一番入りやすく、一番定員割れを起こした高校ということで来たんでしょう。ちょっと大げさですけど、学校を取り巻くほど列ができて、大変なパニックに陥りましたけれども、そういう実態がありました。

今紹介した二つの話は全く無関係のようですけれども、実は神奈川の教育の置かれている、それぞれの側面を代表しているのではないかとということで、ちょっとご紹介をさせていただいたんです。

その中で、「課題集高校」というところがどういう問題を抱えているかということ、少し具体的な事例も引きながらお話をさせていただきたいと思えます。

皆さんのお手元の「教文研だより」の「今高校の現場では」というところへ書いていますので、ちょっとお恥ずかしい内容ですけども、その内容を幾つかピックアップしながら話をさせていただきたいと思えます。ページ数でいくと二十ページから始まっています。

中学校と高校の持っている決定的な違いは何かというと、それは「義務教育だ」とか、あるいは「義務教育ではない」ということではなくて、小・中というのは基本的には、私立志向がはなはだしいということがありますけれども、自然集団というのが形づくられていると思えます。できる子もできない子もいろいろな個性を持った子が集まっているということですね。地域差はあるでしょうけれども、基本的にそういう形になっている。

ところが、日本では、これはほかの国でもそうでしょうけれども、高校に来て初めていわば「学力」というものによって階層化された枠づけをされるんですね。中学校では一つのクラスに一〇〇点をとる子もいれば、〇点をとる子もいるでしょう。ところが、高校は一〇〇点ばかりとる子の学校と、〇点ばかりとる子の学校というふうに、それは極端な話ですけども、そういうふうに階層化された、子どもたちにとっては初めての場なんです。そこに非常に大きな矛盾が生まれてきています。

皆さんも、「格差と序列」というのがどの学区にも歴然と存在することはご存じでしょう。そういう中で、例えばこの冊子で紹介しますと、二十二ページに少し資料があります。これはちよつと古い資料なんですけれども、一九八六年度の県立の全日制高校の退学者の上位十五校を組合の調査でまとめたものです。ここに挙げられているトップの高校では一年間に百三十三人の退学者を出しています。しかし、同時に、文章をお読みになっていただければわかりますように、一人の退学者も出していない高校が十数校あるんです。生徒指導的なことの全く心配のない学校から、ほとんど毎日生徒指導にかかすりあわなければいけないような学校があるんですね。つまり、これが中学と高校の決定的な違いだと思います。

中学校にもいろいろな問題を抱えた生徒がいることはよく存じています。それで皆さんが日夜苦勞されていることはあるかと思えます。今はそれが小学校の高学年に移ってきたみたいなことを言われますけれども、そういう中で高校というのははつきりと「学力」によつて区切られた場として、今神奈川においては、これは神奈川だけじゃなくて日本全国と言つていいと思えますけれども、存在するわけです。そこには独特の問題があります。

今一番抱えている問題はどうかということかと、例えば中退者の増加です。神奈川でも非常に中退者が多くて、日本全国では十二万人みたいな話もありますけれども、三千五百人ぐらいが神奈川の状況ではないでしょうか。ところが、この退学者一つをとつてみても偏在しているんです。一人もいないところもあれば、百何人も出るところがある。例えば高校ではたばこを吸つたり、暴力行為をほたらいたりすると、特別指導をやりますけれども、特別指導は家庭謹慎みたいなことでやりますね。そういうものの全くない学校、全くというのは言い過ぎですけれども、ほとんど一けたというところもあれば、二百件近くやらなければいけない学校もあるわけです。これは「学力」というものによつ

てはつきりと区切られているんです。

もう少しそこを具体的に言いますと、冊子の次のページ二十三ページに、私が作成した表があるんです。どこの学区とは申しませんが、およそ見当はつくと思います。そこにいろんなことを書きました。その表を見ていただければわかるように、今、学力差と経済的な格差というのが非常に一致するような構造ができ上がっています。例えば田奈高校を例にとつて言えば、授業料免除者とか、あるいは授業料を滞納するみたいな家庭が非常に多いのは事実です。この表からいくと、Wという学校は免除者が一、Xという学校は〇、それに対してYとZは四十四という数字が出ています。つまりこれは生徒の学力と経済的な格差というものが非常にマッチしたような形になっている。そこに大きな問題があります。

私たちは地域に根差した学校を求めてきました。いわば「一〇〇校計画」は入れ物としての機能を生徒急増期に果たしてきたわけですが、「一〇〇校計画」の一つの理想は、地域に根ざした高校というのを追求してきたわけですが、残念ながら地域に根ざしたとは言えないような状況に今なってしまうている。どちらかというと、あけすけな言葉で言えば、これは批判を承知で言いますけれども地域の鼻つまみ者ですね。例えば生徒指導的な問題で言えば、たばこを吸う、ごみを散らかす、生徒が器物を破損する、格好が悪い、集団で悪さをする、さまざま取り上げれば切りがないようなことで地域からは孤立するような状況が生まれている。そういう中で、入学させた生徒をいかにして育てるかという意味では非常に困難が横たわっているということが指摘できると思います。

「公教育」というのは、先ほど加藤さんは「すべての生徒に平等な教育を」ということを考え、追求しているとおっしゃいましたけれども、少なくとも田奈高校では、「すべての生徒に平等な教育を」という、その理想からはかけ離れてしまったような現実がある。昨年度も五十名を超える退学者が出ま

した。一人一人の具体的な中身を知れば、それが単に生徒自身の問題行動によって引き起こされたというよりも、非常に構造的な問題として「退学」というのが最終的にあることをしみじみと私は感じます。

これをどうやって我々が解決していくかということになると、今の「格差と序列」の構造が放置されたままでは、なかなか難しいのではないだろうか。今、田奈高校では具体的にはいろいろな試みややっているところです。例えば授業を二十人クラスにして展開していますけれども、しかし、問題の根本的な構造は変わらないわけですから、これを「焼け石に水」と考えるか、幾らかの「希望の光」と考えるかは、いろいろと意見が分かれるところだと思えますが、そういう構造を変えていくみたいなのがないと、基本的には問題は解決されないのではないだろうか。じゃ、どうやってそれを変えるのか。

私は、格差が完全になくなることはないと思います。これは我々人間のさが（性）みたいなものです。これだけ日本が「一億総中流化」という中で、「差異化」というか、人と違ったみたいなのを指すとすれば、一番手っ取り早いのは、「どの学校に行った」「どの大学に入った」ということです。こういう「差異化」みたいな意識が我々の根底にある以上、序列や格差を完全には解消できないだろう。しかし、もう少し緩やかな形にして、例えばいろいろ問題のある生徒が来ることは、これももう「公教育」としては当たり前なこと、それを引き受けて教育するのは我々の責務でありますけれども、もう少しそのペーステンジを減らしていけば、学校の持っている育成機能を十分発揮できるのではないかと考えているんです。

ところが、残念ながら、今、我々のやっている仕事は、先ほどもちよつと紹介しましたように、問題生徒をいかにして学校の中に閉じ込めておくか。あるいは彼らをどうやって管理していくか。そうい

うことになっていて、その大状況の中で忙殺されているのが現実です。こういう中でア・テスト問題をもう一回再検討する余地があるのではないかというのが、私の正直な気持ちです。

冊子に書いてあることでもありますし、十五分という時間の中ではなかなか触れ切れませんので、また後でご質問等があれば、ぜひその中でまた意見を深めたいと思います。

時間が来ましたので、ちょっと雑駁な話で申しわけなかつたですけれども、問題提起とさせていた  
だきたいと思います。よろしく願います。

○浅井 ありがとうございます。中野さんからはご自分が勤めていられる学校の経験をもとにお話をいただきました。「神奈川方式」のもとで格差と序列というのが生み出されてきた。その中で最も底辺に位置づけられていると言われる高校の実態が率直に語られたと思います。

神奈川では、一名の中退者も出ない高校から、百数十名の中退者を出す高校まで、そのまた格差と序列が親の経済格差と一致していると。学力格差と経済格差の相関関係を表によってお話をしていた  
だきました。最終的には今の格差をどうなくしていくか。すべてなくならないとしてもどう緩やかにしていくか。その意味では「神奈川方式」の中にあるア・テストというものについては再検討すべき  
ではないかというご意見でした。

次に、保護者の渡邊さんから、ご自身の経験、それからお二人のお子さんをお育てになって、高校  
入試で直面したさまざまな問題、それから今お考えになられていることをお話しただければと思  
います。渡邊さん、よろしく願います。



○渡邊（保護者） こんにちは。ただいまご紹介をいただきました渡邊と申します。

私は、大学生の娘と高校一年の息子の二人の子どもの母親です。きょうは、この春高校受験をしました息子の話をさせていただきます。

中学校生活三年間を振り返ってみますと、あつという間に過ぎてしまいました。いろいろなことがありました。うちの子は小さいころから野球が大好きだったので、部活は野球部に入り、朝練・午後練と野球、野球の毎日でした。クラスのほとんどの友だちが塾に行っている中で、部活ができなくなるといつて塾にも入らず、部活が終わると勉強もしないでテレビを見たりファミコンばかりしていました。

小学校のうち勉強はしなくても何とかなつたのですが、中学になって、勉強しないとだんだんついていけなくなつて、成績は低下していくばかりで。学校は大好きなのですが、授業にだんだんついていけなくなつていきました。期末テストのときに数学で二十五点をとつた時は、本人はかなりショックを受けたようです。そのころからでしょうか、「高校には行かないで、僕は就職する」と言い出したのです。私たちもびっくりしてしまいました。うちが畳屋をしておりますので、家業を継ぐと云うのです。「僕には強力なコネがあつてよかつたよかつた」、親子だからストレートで入れると思つているわけです。すっかり自信をなくして勉強から逃げ出したい気持ちでいっぱいだったんだと思うのです。

何とか本人に自信を持たせてあげたいとは思つていたのですが、どうしたら良いものかわからず、主人とも相談して、仕事が多量に大変なことか店の手伝いをどんどんさせてみようと言う事にしました。以前から手伝いはさせていたので、そのころには、一枚三十キロもある畳も運ぶ事ができるよ

うになっていましたので、本人もすっかりうちの跡継ぎになるという気になっておりました。

そして二年生も半分が過ぎたころ息子に「うちは高卒からじゃないと採用しないし、筆記試験と面接試験があるのよ、つらい事があると逃げ出してくるような人やコネは全部お断りしているんだけど」と言いましたら、息子はびっくりしてしまいました。「親子なのに」という感じで。それで、「もしどうしても畳屋になりたいんだったら、自分で就職先を探してくるように」と言いましたところ、それ以来就職のことは一切口にしなくなりしました。

ア・テストの三週間前だったと思います。突然「塾に行かせて下さい」と言って近所の塾を探して来たのです。「復習中心のところでは合っているところだと思う」ということを言われました。そのころは周りが一生懸命勉強しているので、本人はかなりあせっていたようでした。そのときになって初めて、自分は野球が強い公立の高校に行つて自分の力を試してみたいという希望を持っていたことを話してくれました。

先ほどもお話がありましたように、退学者がすごく多いということなので、高校の進学はやはり子どもの行きたいところに行かせたいと思っていましたので、早速塾にお願いに行きましたところ、「お母さん、のんきですね。一年前に来てほしかったですよ。今は将来のことを考えて小学校三〜四年ぐらいから塾に来させる人が多い時代なんですよ」と言われて、もうびっくりしてしまいました。

私の中学時代とは違って、今の中学生は「神奈川方式」で、中学に入るとア・テストや調査票を意識して自分のやりたいことも思い切りできないで、伸び伸びした中学時代をおくることができなくて、かわいそうだなと思っていました。本人は塾に行き出してからはみんなに追いつくんだといって、もう本当に必死に勉強しだしたのです。ア・テストが無事に済むと、「神奈川県は入試が二回あるみたいでイヤだよ」としきりにぼやきはじめました。「神奈川に生まれ育ってきたんだから仕方がないこと



よ。自分が体験してみても反対だったら、後輩たちのためになくすように運動でもしたら。やってもみないうちから文句ばかりを言うのはよくないと思う」と言った事がありました。

秋には成績も大分上がった、毎晩遅くまで真剣に勉強に取り組むようになっていました。でも、相変わらず店の手伝いと、うちの風呂当番は息子の仕事にしておりました。余りにも一生懸命勉強している、その当番を娘が「かわいそうだから私が交代する」と言い出したんですね。でも、本人は「ちょうどいい息抜きになるから」と言つて、それは今でも続いております。そしていよいよ学校を決める時期になりました。野球部の友だちと一緒にY校に行こうと約束したのですが、友だちが先生にどうも危ないと言われて、サツサツと志願変更してしまつた時は、ちょうど同じぐらいの成績だったので大分不安になっていたようでした。そんな時は「目標は高く持っていれば無理だつたらいつでも変更できるじゃない。最後まで目標に向かって頑張つてみたら」と励ましていました。

そしていよいよ最後の面談になると、もう大分弱気になって、「高校だつたらどこでもいい。入れるんだつたらどこでもいい」つて言うようになりました。担任の先生や学年主任の先生の一言がとても刺激になって、自分自身で第一志望校の学校に決めて無事に合格することができました。

受験が終わつてみて、本人は、あんなに「神奈川方式」はいやだと言つていたのですが、「ア・テストのおかげで早い時期にやる気になれて自分の希望する学校に行けたので、やっぱり僕は神奈川方式でよかったと思う」と今は感謝しております。入試前に風邪をひき高熱を出したりして、自分で健康管理の大事さとか、辛いことから逃げ出さないとか、いろいろ受験を通して多くのことを学んでいようと思ひます。

私は、本来、「教育」とは人間が社会に出て自分の判断で人生を切り開いていける土台をつくることじゃないかと思うんですが、今、「教育」という言葉を、受験とか、進学とか、学歴という言葉の領域

とほとんど同じように考えている人がふえてきているなということをとでも強く感じました。きょうは、勉強ぎらいの子どもの話を最後まで聞いてくださってありがとうございます。

○浅井 ありがとうございます。渡邊さんからは、お子さんをお育てになった経験から、中学時代、部活を一生懸命やっていたんだけれども、入試の壁という中で、今の「神奈川方式」は中学時代に思い切り好きなことに打ち込めない制度である。そういう意味では「神奈川方式」は最もそのお子さんにとっては不適當なものであった。しかし、そこから自分で努力をして「神奈川方式」のもとの入試を突破して、今、目的の高校に入れたときに、「神奈川方式」でよかったというお子さんの声とともに、お話をさせていただきました。

教育についての根本的な理念、「自分の判断で人生を切り開いていける土台づくり」まさにそのとおりだと思いますが、今の教育が受験や、学歴や、入試というところとイコールになっていること一番の疑問があるということでの話をいただきました。

最後に、神奈川大学の黒沢さんのほうからお話をいただければと思います。よろしく願いいたします。



○黒沢（神奈川大教授） 黒沢です。どうぞよろしく願います。

ただいま三人の方々から、ご自分の職場、あるいは家庭の生活の中から、体験に基づいた具体的なお話がされて、大変勉強になりました。私は大学の教員ですので、本来ならば自分の大学について話をすれば具体的になるんですが、それはきょうのメインテーマでございませぬので、教育の改革と入試の問題に合わせたお話をさせていただきます。

まず最初に、加藤さんのほうからもお話がありましたし、中野さんかなり具体的に話されたよう

に、日本の今の教育はあまり健全ではないというのは、皆さんも同じ考えではないでしょうか。私もそのように考えております。それを「病理」とか、「問題」というふうにいえば、色々な見解があると思いますけれども、私は、学校間に「格差」があることが最大の病因ではないだろうかと思えます。

例えば大学に例をとりますと、二〇〇八年には大学の収容能力(器)が受験生を超えてしまっているといわれています。これは非常に単純な計算なんですけれども、そうなると、入試なんかは要らなくなるだろうというふうに数字的には言えますが、決してそうはならないわけですね。やっぱり格差がありますから、いわゆるランクの高いところには沢山集まって、そうでないところはがら空きになってしまいうという状況が出てくるわけです。高等学校でも同じことが言われます。私だけではなくて、例えば文部省の諮問機関であります十四期中央教育審議会の西尾幹二さんという委員もはっきり言っておられます。文部省が格差があることを公的に指摘したということは遅すぎますが評価してよいことだと思います。

ただ、問題は一面では格差の構造が日本の経済発展にかなり貢献していた面もあったと思うんですね。我々は相対的にですがかなり裕福になった、豊かになったという面は否定できないわけですね。経済発展には色々問題もあるけれども、結果としてはよかったじゃないかという意見も多く存在します。しかし、さまざまな批判があるにもかかわらず文教の最高の責任者が格差が病理なんだということを言ったことを認めたことは、やはり大きな病理が無視できない程に広がってきているということではないかと思えます。

いろいろなところにあらわれていますけれども、特に高等学校に著しいのです。先ほど中野さんもちょっと触れられましたけれども、いまや進学率が九十六%ぐらいになっているんですね。これは「準義務化」と言っていると思います。ただし、法令的には「義務化」になっていないわけですね。つま

り形態と実態が相反しているという高校の現状に最も多くの問題が出てきているのだと、私は考えています。

その病理が実際にどのようなようになっていくかということはいわゆる「教育困難校」の現状を見ればはつきりわかります。

特に中野先生はご自分の職場のことを、この資料でも実際に統計表を使いまして一目瞭然と示しているので大変わかりやすいと思います。あえて私なりに言いますと、一つは「進学校」と言われる高校では、いわゆる「エリート」を指して学力向上の競争が非常に激しく行われています。神奈川の場合には公立高校はそうでもないでしょうけれども、この間鹿児島に行つて、そこで開かれたフォーラムに参加をしたんですけれども、進学競争はすごいもので、学校の始まる前にゼロ時間という時間がありますし、終わった後の補習という形ですけれども、実質的な授業があります。二日休むと保護者呼び出して注意するそうです。これは明治維新のときに非常に先進的だった鹿児島が今や全く後塵を拝しているということが県民意識の中かなり強くあつて、学力向上（進学競争）を支持しているようです。十一府県というふうに記憶しますけれども、新聞報道なんかを読めば、教育行政もそれに対して奨励金みたいなものを出しているようです。九州というのは首都圏から遠いせいかとくにそういう傾向が強いわけです。

神奈川の場合は首都圏のしかも大都会ですから、受験産業が、先ほど塾の話がありましたけれども、代行しているわけなんです。だから、この病状というものは全国的に蔓延していると言つていいのではないのでしょうか。そこでは人間にとつて非常に大事な人権などの教育が軽視されると報告されています。今、渡邊さんもおっしゃいましたけれども、教育イコール受験というふうになっておりまして、受験に必要なものはほとんど軽視されてしまう。補習のための教員の負担も非常に大き

くなっていることです。繰りかえしになりますが、「人間とは何か」とか、人権に関するようなことは直接受験に関係ないということで大変おろそかになっているという話を現地の先生方からききまして、非常に暗い気持ちになりました。

一方、これはもう繰り返しませんけれども、中野先生が言われました「底辺校」といいますか、神奈川では「課題集中校」、文部省では「指導困難校」と言われていますが、偏差値の低い学生がかなり多く集まる高校ですね。そこではもう多くの生徒が分限意識と申しますか、「どうせ俺はこんなものだ」というあきらめ、諦観みたいなものが深まり、広がってしまっていて、普通の意味での授業が成立しないのです。

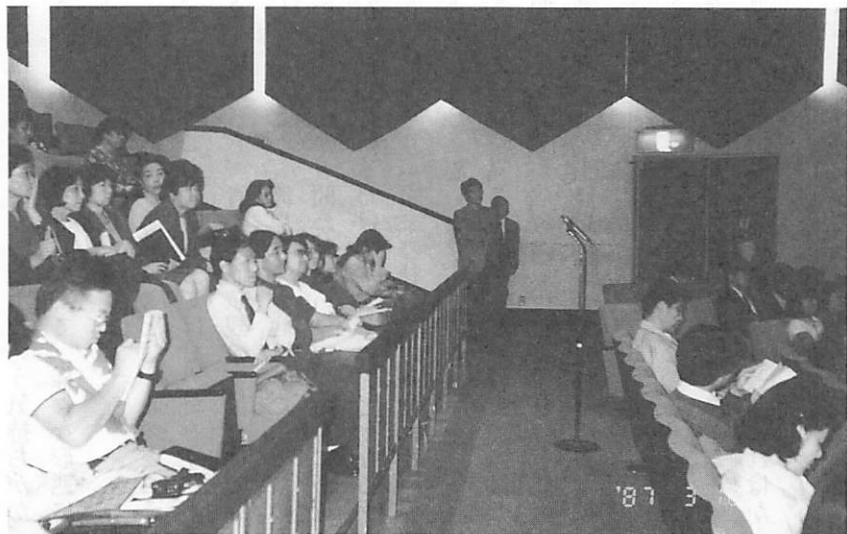
それから、これまた中野先生が言われましたけれども、地域社会からはきらわれ者になっています。この点についてもある「困難校」を見学させていただきまして、実際にそういう感じを持ちました。

中野先生は非常に頑張っておられますけれども、なるべくそんなところで教えたくないという教員も多いことは一概に非難はできないだろうと思います。ですから、教員から、地域からうとんじられ、授業もうまくいっていないし、先ほどご報告がありましたように、家庭的にもいろいろ問題が多いのです。以上のように進学校と「底辺校」の両方に、どちらにも未来の教育から見れば、多くの問題があるということだと思います。

我々は、「経済発展」という一定のプラスの面と同時に、教育にいま申しましたような病理を、問題点を非常に多く残したということを、経済大国になった今改めて考える必要があるのではないのでしょうか。「追いつき追い越せ」というスローガンでがんばった、貧しかった時代には多少のことは大目に見られたり、見過ごされてきましたけれども、今や世界に冠たる「経済大国」になったからには、「教育の赤字国」の実態を大いに考え反省する必要があるのではないかと思えます。

ところで、国は以上の病状に対してどんな処方せんを出しているのだろうかということをし上げます。これも皆さんはよくご存じで、「釈迦に説法」みたいな話になりますけれども、「格差」を直接治療するというのではなくて、むしろいろいろなタイプの高等学校を用意して、入学試験も学力試験だけではなくて、やる気とか、ボランティアとか、そういう側面を加味してやったらどうかという提案です。これも具体的なことは今は時間の関係で申し上げられませんが、要約しますと「縦」の格差があることはいけないから、「横」とか「斜め」ぐらいに直していくということではないでしょうか。こういう処方せんを出しているのだと思います。次々と出された改革案を、私なりに乱暴に言ってしまうと、以上のようであると思います。

この処方せんについて加藤さんは非常に否定的に言われましたし、私もそんなことでできるだろうかと思えますけれども、しかし、その提言の背景には青年の価値観が非常に変わってきたということへの配慮があることに注目したいと思えます。画一的な



ものはいやだ、いわゆる「みんなが同じよりか自分だけは個性的になりたい」という気持ちになり今の青年の間にふえているのではないのでしょうか。その心情をうまく取り入れて、様々な形態にして対応しようという方策ではないだろうかと思うんですね。

ただ、これらの改革は始まったばかりですから、どういう効果があるかということはいまのところ即断はできないと思います。加藤さんは現場におられて、これはとても対応としてはだめだろうというご意見だと思います。私もそういう危惧は持っておりますけれども、青年の価値観の変動だけでなく大人も同様です。社会主義国家がああいうふうに崩壊していくとか、湾岸戦争が起こった中で、これまで絶対にはいいと思っていた日本の平和憲法の有効性の問題なんかも問われています。さらに最近の「政変」なども考えてみますと、かなり従来の価値観が変動しているわけです。この先どうなるかわからないようなアモルファスな状況の中で、子どもたちにはつきり「未来の社会はこうだ」ということがなかなか出せない、そういう現況も背景としてはあるだろうと思います。

では、どうしたらいいのかということに移ります。こちらの資料を見て下さい。これは皆で議論した上で出した中間報告です。全く単純に考えれば、学校間格差が最大の病理の原因だとすれば、総合選抜制度によってたとえば十校あるところを一番から十番までずっと生徒を割振っていけば、各学校間の学力は均等化するわけです。

しかし、先ほど言いましたように、価値観の多様化がかなり浸透していますので、この方式を本当に今できるような状況にあるだろうかということを考えざるをえません。私個人としては格差是正の名案だと思えますけれども、果たしてそういう合意が今県民の多数に成り立つかということ、これはかなり難しいのではないかと思います。

やり方は若干違いますけれども、大分とか、岡山なんかではこの選抜方式をやっているんですね。

だから、できないとは言えませんが、合意が成立しないということもありませんが、かなり難しいのではないだろうか、そういうふうに思います。

一学区内の平均学校数は十校ぐらいですか、神奈川の場合は。全体としてそんなところですね。だから、文部省の規定によれば「大学区」です。ですから、格差是正のためには、この学区をもうちょっと縮める。本当ならば、戦後の理念で言いますと、一つの地元の学校に行くという小学区ですね、これが理念としてあるわけですが、それだと、学校の選択がなくなってしまう。つまり、その学校が本当に生徒にとって適当な学校であつたらいいかもしれないけれども、ちょっと自分の考えとかけ離れているという場合もありますから、選択の幅も若干欲しいということも考える必要があります。ですから、五〜六校ですかね、数は地域によって、余り細かく言えませんが、中学区規模（五〜六校）にして、その中で各学校の特色を持たせる、こういう案はどうでしょうか。

しかし、加藤さんがおっしゃったように、基礎的なことはどの学校に行ってもきちんとして学べることが必要だと思えますね。そのほかに選択科目はかなりふやすような努力をして、うちではこういうところに傾斜させたいとか、それぞれの学校の個性化も必要だと私は考えております。中学区規模にして、その枠内で選択の自由を認める、これが私の提案です。

もちろんそういう学区を設けることは自由の制限ということですが。社会主義が崩壊して、その実情がわかると自由のないのは本当にいやだ、それに比べて現在の日本は非常に自由があつていい、そういう気持ちも私は十分わかるような気がします。「自由」ということはやっぱり大事だろうと思えます。しかし、ほかの方も触れておりましたけれども、制限をなくしてしまえば、強い人が勝つていつちゃうということになるだろうと思えます。「強い」というのは別にけんかするということではなくて、学力のある人、また、家庭の持つてゐる資力の強さもあります。東大には親が一千万以上収入がないとな



かなか入れないんだといわれています。かなり親の収入は高いわけですね。それから保護者の学歴なんかかなり左右しています。そういう階層化がありますから、今のままに無制限に「自由」を認めると、非常に差別のある社会になつてしまうでしょう。

そういう社会は「公正」という考え、あるいは共に育つて、共に生きていくような、そういう地球規模で今大きくなりつつあるようなスローガンと申しますか、理念からいえば全くずれていくわけなんです。ですから、全く均一にしろというのではなくて、公正のためには一定の制限ということは許されるのではないのでしょうか。それが中学区規模による学区制の制限ということですよ。これによってかなり病理の原因である格差を是正できる筈だ。そんなふうに考えているわけです。

ちよつと時間がオーバーしましてすみません。

また何か質問がありましたら補足させていただきます。一応私の申し上げたいことは以上です。

○浅井 ありがとうございます。黒沢さんからは、日本の教育が戦後さまざま問題を抱えながらも、一定程度結果的にはよかつたという声もある。けれども、今この時点でも文部省自身も、日本の教育の最大の病理は高校間格差であると認めざるを得ない状況まできている。そういう意味では今の高校問題における最大の病理は学校間に格差があることであるところから、格差をなくすための一つの考え方、それは中学区規模における、それぞれの高校に特色を持たせて一学区数校程度の学区に縮小していくことである。ある種の自由の制限はそういう中ではやむを得ないという考え方が示されました。

神奈川以外で今盛んに行われている学力向上運動の例も引きながら、このままでいけば、日本の教育はますますゆがんでいくという警鐘も含まれていたと思います。

四人の方々からそれぞれの問題提起、問題意識に基づくお話をさせていただきました。先ほど私の方で、この後、ちょっとした休憩をといたうふうに申し上げたのですが、大変申しわけないんですが、ごらんのように会場もほとんど埋まるほど参加者の方がお見えになっています。休憩をとって、ここで席をお立ちになっていただきますと、また次に再開というところが時間的にもかなり難しくなってしまうので、休憩をとられる方はどうぞとっていただいて結構ですが、シンポジウムはこのまま続行させていただければと、ご了承いただきたいと思ひます。

シンポジストの方、ちょっとこの時間を利用してお茶でも飲んでのどを潤していただければと思ひます。

初めてという方もおられますし、緊張した中でわずか十五分ということでも十分ご自分のお話ができただかどうかというのも、大変不十分だったとは思ひますけれども、後の討論の中でまた補っていただけばと思ひます。

では、この後、参加者の方々からまずご質問をお受けしたいと思います。具体的にどの方という形でしていただいて、ご質問を具体的にさせていただけると大変ありがたいんです。もちろん四人の方すべてでも結構ですし、ご質問をいただきたいと思ひます。いかがでしょうか。

## 質 疑 応 答

○芝崎 浜教組の芝崎です。

中野さんと黒沢さんをお願いします。

触れられなかったので、次の討論で触れてほしいなど。高校は今履修主義をとっていますよね。したがって、普通だったら三年間で順番に出ていく形になっているわけなんですけれども、学力がそういう点でついているかどうかという問題で、高校教育のあり方の問題をちよつと触れてほしいなど。

つまり、田奈高の困難なことは昔からわかっているわけなんですけれども、そういう中でそういうふうな内容についてどうとらえていくのか。今後とも履修主義という方向をとっていくほうがいいのかどうか。これは教育課程にかかわる問題なので、ぜひ黒沢先生と中野先生に触れていただきたいと思っんです。

○浅井 お二人への質問ですが、よろしいですか。では、中野さんのほうから。

○中野 それでは先に。「課題集中校」としては歴史があるということを聞きましたので。

確かに高校は単位制ということ掲げているながら実は学年制になっているわけですから、例えば極端な話を言いますと、一学年で予定されている単位が二十八単位ある。二十八単位を全部とった人しか二学年に進級できないんですね。例えば二単位落とす。きらいな教科、たとえば数学がきらいで、教師もきらいで、授業にも出なくて、結局単位がもらえないという場合に、その単位を落とすとほかの単位は全部とっているのにそれだけで二学年に進級できないみたいなのがありますね。いわば履修と修得の一致ということになっています。

そういう中で、例えば苦手な科目で点がとれないで赤点をもらったり、あるいは教師がいやだったり、教科がきらいだったたりみたいなことでも授業に出てこないと出席率が足りなくなつて単位がもらえない。そういう形で毎年留年する生徒がかなりいます。この生徒たちはまた次の学年にいても同じようなことを繰り返して、退学予備軍的な存在になっているわけですから、こういう中で正直に

申し上げまして、これは誰かが言っていたかと思いますが、例えば「高校生の中にはフランス語の原書を読みこなす生徒もいれば、自分の名前さえ満足に書けないような高校生もいる。しかし、建前としては「高校生」という形であるのが日本だ」というみたいなことが存在している。そういうことからいけば、著しく基礎学力が劣った生徒が入学してきていることは事実です。

今年のデータで申し上げますと、数学〇点という、例えば数学の入試問題の一番最初にある「1000000」、この計算ができないという生徒が入ってきていることは事実です。我々は、この間こういう基礎学力の欠けている生徒をどうやって育成していくのか。要するに卒業まで育て上げていくのかということで、さまざまな試みをやってきました。

一つは、これは今現在やっているのをちよっとご紹介申し上げますと、一学年と二学年において生徒が一番苦手意識を持って一番単位を落とす教科である英語と数学を一クラス二分割でやっています。一クラス二十人です。数学は一年から二年、三年まで二十人以上で教わるクラスは一つもありません。英語も一年と二年ではそれぞれ四単位ずつありますけれども、すべて二十人クラスで行っています。

こういう形にしてやると、生徒も四十人あったよりもいわば二十人分減ったわけですから、目をかけてやれるし、丁寧に教えてやることができ、その結果赤点者も非常に減りました。しかし、同時に皮肉なことにこういう結果が出てきました。生徒の基礎学力がいかにないかということが非常に明らかになってきたということです。数学について言えば、小学校四年生、五年生の段階でもうつまずいている生徒がいます。そうすると、さつきおっしゃったように、こういう生徒に高等学校の微分・積分を一体どうやって教えるんだと。はつきり申し上げて微・積とは名ばかりで、いかに生徒に点をとらせるかということに我々は心を砕いています。これは多分「進学校」から見れば、同じ高校生の中身としては非常に問題を含むかもしれませんけれども、そういう中にあるのが「格差と序列」の問

題だと思えます。

そうすると、もう一步突き進んでお話ししますと、格差を攪拌するというか、緩やかにすれば、今度は逆な問題が出てきます。つまり、学力差が非常に離れた子どもたちが一つの教室にいる。つまり、小学校と中学校の今の状態が生まれてくるわけです。これにはどうやって対応するのか。これは一つは、言い方はそれぞれですけども、我々は「少人数」みたいなことを言っていますけれども、文部省は多分「習熟度別」と言うでしょう。これは呼び方はどうでもいいんですけれども、そういうことを我々がとらえ返していかないとできないだろう。そのためには金がかかります。

例えば今田奈高校がやっていることについては、こういう場であけすけに言っているのかどうか知りませんが、県のほうからかなり人的加配をもらっています。定員でいくと五人ぐらい余分にきているのではないのでしょうか。名目はいろいろありますけれども、非常勤時間数も多いです。我々自身も時間割では多少かぶっているところがありますけれども、そういう他の学校とは違う支援を受けながら、いわば学校の中でいろんな改革をやっている状況で、まだ履修と修得を別個の考えとしてやるところまでいっていません。

ただ、方向的にはそういう方向を目指していますけれども、現段階ではとりあえず学習集団を小さくしていったって、いわば丁寧に、手厚くやることによって、何とか卒業まで持つていく。そういうことをやっている段階です。

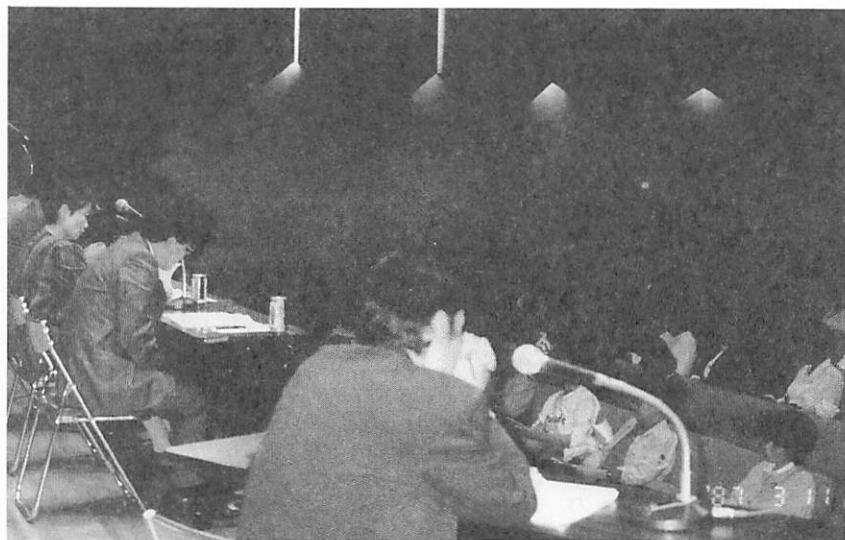
○黒沢 中野さんがおっしゃったことと重なりますけれども、私は、単位制については、もともと戦後の高校はそうだったわけですから、もつと導入していくべきだろうと思っっているんです。単位制は運動をやっている方々から見ると大変評判が悪いんです。私に対する批判も非常に強いです。それはどうということかという、単位制だと基礎学力がうまく養成できないんじゃないかという疑問が確か

にあるだろうと思います。

ですから、全国の単位制高校の四十三校といってもいろんな形態があるわけですが、私が実際に見学に行ったのは、杜陵高校というもともと通信制と定時制からできたところですが、岩手県の盛岡にある高校です。そこは正直言いますと、「教育困難校」に近いところで、生徒もものすごく誇りがなくて、やっかい者みたいに思われていたそうです。そこで、単位制高校の移行についてかなり不安はあったけれども、思い切つてそれに乗りかえたわけです。そういう事情で一番日本で古い単位制高校ですけれども、結論から言うと、私が受けた印象ではかなりよくなっているのではないかと思うんですね。

つまり、生徒自身が非常に誇りを持つようになってきたということが、私の調べた限りでは評価できる点です。ただ、やり方はかなり考えなきやいけないわけで、例えば一年にかなり必修を多くして、二年、三年の選択をふやしていくとか、いろんな形態を考えなきやいけないと思いますけれども、私は、一科目落としてしまったために、また同じ学年にとどまるという現行の学年制は幾ら考えてもいいことだとは思えないんです。

もう一つは、単位制のいい特色というのは、従来の社会教育の側面を非常に重視して、社会にあるいろいろな実務・体験を単位に組み込んでいくこととすることです。これも無原則にやってしまうと、いろいろ問題があると思いますけれども、基本は、もともと学校というのは社会にあったものをアレンジして学校の中に持ってきたわけですから、学校でしか絶対できないものは学校でやるのはいいですけれども、そうでないものはできるだけ社会に返してやることが非常に大事ではないだろうかというのが私の持論なのです。ですから、将来そういう方向へ全ての学校がいくことがいいのではないかと私は考えておりますので、一定の配慮が必要ですが、単位制大賛成で、単位制高校の



未来に私はかなり期待を持っている立場です。

○ 浅井 では、ほかに質問をとらせていただきます。質問のある方。

○ 中野 中野といいます。

きょう、前で配られました、このパンフレットについて若干の質問ですけれども、この一番最後に書かれている、第三章第二節の部分で一番最後のところですけれども、黒沢さんが書かれたと思うんですが、最後のページの左側半分の下のほうです。

「言うまでもなく努力は必要であるが、当然限界があることも認めなくてはならない。この意味では画一主義批判のもとに……」云々かんぬんというのがありますけれども、これはもしかすると、能力はもともと遺伝によって決まっている。七〇年代に自民党が出した、能力主義というか、能力による差別感ですか、そういうものと全く軌を一にしていると思うんですけれども、そういう能力によって振り分けていくことは、現実の部分において学校間格差がその延長線上にあるんだと思うんです。

その学校間格差を一応問題にされているという黒

沢さんの指摘は非常に理解できるんですけども、この発想がなぜ出てくるのかよくわからないんですけど。その部分を質問したいということと、総合選抜ということも学校間格差をなくすことについては、私個人としても大賛成なんですけれども、その前のページにいきまして、学校選択の自由ということで、「一部エリートについては、その総合選抜をくぐり抜けて学区外へ」、いわゆる進学校へ行きたい者は行かせていいと、そういう形の総合選抜はどういう意味合いがあるのかということを質問したいと思います。

以上二点ですけれども、最後に書かれている能力主義を漂わせるような書き方と、学校間格差をなくそうという考えとは、私は結びつかないのではないかなと思います。その辺についてお聞かせ願いたいと思います。

○黒沢 ここは書き方が十分ではなかったかもしれない。学力とは何なんだろうか、あるいは人間の能力とは何なんだろうかということはかなり難しい問題だろうと思います。ただ、非常に常識的に考えてみまして、狭い意味の学力に限定しますと、一つのある問題をものすごく簡単に解いてしまう人と、かなり多くの時間をかけてもなかなか解けない人がいるのは、認めないわけにはいきませんね。私のいいたいことは、現実の高校生にはフランスの現代思想を原書で読んでしまうような人、これはちょっと極端かもしれませんが、それからろくに自分の名前も書けない、そういう差のある人が同じ高校生として扱われていることは事実ではないでしょうか。それを現実的に認めた上で対策を立てないと解決は難しいのではないかとということなんです。すべての人が相当な努力をすれば、みんなが同じくなるような、一定の学力にまで到達できることは本当に可能なんだろうかという疑問です。こういうことは一種の幻想ではなかったのか、願望、幻想を現実であるかのように考えてきたのではなかったかと私は考えざるをえないのです。



しかし、学力の差は決して人間の差ではないわけです。学力がすなわち人間的な価値になるのでは絶対ないわけです。それもここに書いてあると思いますけれども。ところが、日本の現在の社会では、学力の差がすなわち人間の差であるかのようになっているところが問題ではないでしょうか。それが「一元的な価値観」と相関的なのではないかと思っています。この点はかなり議論を呼ぶところだろうと思ひまして書きましたけれどもいかがでしょうか。

もう一つは、総合選抜の問題ですけれども、あるいは学区制の問題についても、公立では規制ができて、私立の場合にはそれは規制できないのではないかとこの点です。これは西尾さんも私立は管轄が違いますし「治外法権だ」と、こういうふうに言っております。これに対しては強力な何か法的規制ができればいいという意見もあります。けれども、「私学の自由」という錦の御旗がありますから、学区の制限のないエリート養成的な学校をつくってしまおうでしょう。現実に神奈川にもありますし、各県に幾つかありますね。そういうものについては残念ながら無力だろうと私は思います。

もちろん、協力してくれる私立があれば大いにやるべきだということは、私も提案しています。けれども、しかし、そこから逃れて、「俺はそんなのはいやだ」という人間を強引に引つ張り込むわけにはいかないんじゃないでしょうか。そのためには強権力でやるよりは、むしろそんなに無理しなくても、各人は格差が是正された、自分に適した高校に行つて、そこその——という言い方もかなり批判されたのですけれども——大学なら入れるし、それでいいんだと各人が思う、そういうライフスタイルでいいんだということを実績で示すことがベターと思います。何も無理してお金を切り詰めて越境し、遠いところでエリートを目指すような無理をするよりは、なるべく地元の学校へ皆で行く、そういう生き方のほうがいいんだということを、少し長い期間で次第にわかっていく、そのための高校づくりをもっと頑張つてやる必要があるのではないのでしょうか。それが私の思いなんです、誤解を

生むような書き方だったことは反省しております。

○浅井 ほかにいかがですか。質問はよろしいですか。

## 討 論

○浅井 この後討論という形で、質問も当然含めても結構ですので、ご自由にご意見をお出しただきたいと思います。私のほうから具体的な課題を設定して、「これについて」という討論ですと、参加者の方々のさまざまな問題意識の中でどうしてもかみ合わなかったり、不十分になってしまうこともあろうと思いますので、きょうのシンポジストの方のお話を聞いて、このタイトルにかかわる形で自由にご自分のご意見をおっしゃっていただいて結構だと思いますので、いかがでしょうか。時間的には四十分から五十分程度の時間が保障できればと思っていますので。

○本間 川崎にあります県立川崎北高校の本間と申します。

私は、「学校選択の自由」という、先ほどもパネリストの方々のお話の中に出てきた問題についてちょっと述べさせていただきたいんですが、「学校選択」ということは、今、実際どういう意味を持っているのかということで、学校を選択することが今の社会では、結局、学校というものが選別の機能を持っている以上、その選択は非常に危険な方向を持っていると思います。

私も高校で進路指導をやっているわけですが、ことし不景気ということで大騒ぎでございませう。例えば就職の場で、企業のほうは明らかにどの高校であるかということが出てくるわけです。採用しない。あるいは求人票を送ってくれる、送ってくれないということが出てくるわけです。幾つかの学校、いわゆる「課題集中校」と言われている学校の状況を聞きますと、ことしは進路状況は壊滅状



態である。実は就職できないということが起こっているわけです。学校がまるごと切り捨てられているような状況ができる。いわば「選別」の機関として学校が使われているわけです。

生徒がなぜ学校のランクを気にするのかと言えば、結局、選別の機能を学校が持っている。だからこそ生徒はランクを一々気にするというのが起こってきているんだと思います。実際生徒はランクについてよく知っています。例えば修学旅行で団体専用列車ということで幾つかの学校が一緒になった場合、私の学校も学区内では中程度かと思えますけれども、それが同じ学区の上位のある学校と一緒にあったときに、上位の学校の生徒はうちの学校の車両にきます。うちの生徒は行きません。生徒はよくわかっています。

ほかの神奈川県内ですけれども、遠く離れたところのある学校と帰りに一緒になったときに、そのときに生徒たちは今度はその学校はどのランクかわかりません。そこで私のほうに「あの学校はどの程度なの」と聞いてくるんです。「そんなばかなことを聞

くな」と。

ただ、今、高校生がそういうランクを非常に気にしながら生きているという状況がある。それがまた選別機能を学校が持たされているところと非常に結びついている。まさにそのために気にしているんだ。大学を受験していく子たちも結局どのランクの大学に入るかということを経験的に気にしている。それも結局は大学の先生方もある程度意識をされていると思いますけれども、それがまた就職なりに結びついていくから、社会的な評価、選別の機能を持たされているからだということになるだろうと思います。

だからこそ、学校選択ということが今高校受験の段階でなされた場合どうなっていくのか。生徒たちが健全に、普通に、自然に育つ状況に今あるのかということをよく考えていきたいと思っています。自然な集団をまず回復して、その中で生徒を育てていかなければ、今、ランクを気にして自分たちはどの位置にあるどの高校に入ったのかということ、あの子はどの高校にいるのかということ、毎日を過ごしているような状態、この中から健全な成長はないだろうと思います。そういう意味で学校間格差は絶対には正しななければならないし、それからまた、学校間格差を生み出していくような学校の選択ということとは「ちょっと待てよ」ということを考えていっていただきたいと思っています。その上で、生徒にとって、学校を選択するのではなくて何を選擇するのかということに考えていかなければならないということだと思っております。

時間もございますので、これぐらいにさせていただきます。

○浅井 ありがとうございます。さらさまな立場の方がいらつしやると思っています。今の入試なり、受験体制というものに対して考えている率直な本音も含めてお出しただけるとありがたいなと思っています。ほかにはいかがですか。

○古川 横浜市の栗田谷中学校の古川と申します。

ちよつとまとまりがつかなくなっちゃうかもしれません。ちよつと全体的な話をさせていただきたいと思います。

まず、進路の問題で一番基本的に考えなきゃいけないことは、「人生八十年」のこの時代ですから、自分は中学校の教師ですけども、子どもたちは六十年以上の人生があるんですね。その六十年以上の長い長いこれから先の人生をどうやって生きていくかということが一番大事なことなんだと思うんですよ。やっぱり中学校でもそういう方面での生き方、指導ということで進路指導をとらえて頑張っているんですけども、子どもたちの関心というのが目先のところというんですかね、一つの関門ではあるけれども、でも、長い人生から見るとたった一つの関門なんですけれども、そこにすごく集中的に気にしていってしまうんですね、子どもたち自身、あるいは親自身も、我々教師自身も。一つ考えてみると、今の日本の教育の制度そのものが一回挫折してしまふと二度と戻ってこれないよくな、そんな教育のシステムなんだと思うんです。その辺の非常に硬直してしまっているような、非常に柔軟性の乏しい部分というのが一つ問題点としてあるかなと思います。

それから、今看板で「神奈川の入試制度」と出ておりますけれども、確かに「神奈川方式」の中で、先ほどのお母さんの発言の中でも結果論だと思っただけです。自分自身が、あるいは自分の子どもがうまくいけば「神奈川方式」というのはすごくいいと思うでしょうし、うまくいかなければ「神奈川方式」は非常に問題がある。これは当然そう思うと思うんですよ。

ただ、ほかの県はどうかといったら、やっぱり同じような問題を抱えていますよね。神奈川では中退問題が非常に多いですけども、別の県に行くと中学浪人が非常に多くて非常に大きな問題を抱えている。ですから、入試選抜制度というのは神奈川に限らずどの県でも、ともかく全国的に非常に

大きな問題になっているのが実態だと思うんですね。その辺のところをしっかりと意識していかなくてはいけないと思います。

それで、選抜制度というのは、先ほどもどなたかが言っておられたんですけれども、もともととはなかつたんですね。あるいはないということの基本にしていたんですね。戦後日本の高等学校のスタートの時点で、文部省の通達等にもはつきり出ておりますけれども、小学区制を基本にして、選抜は行わない。希望者は全員入れる。ただ、終戦直後で非常に経済状態が思わしくないころでしたので、受け皿の問題があるからどうしてもオーバーしてしまう。その場合にしようがないから選抜するんだけれども、経済が復興して受け皿がうまくいくようになれば全員希望を保障していく。そういうところからスタートをしてきて、それが現在に至っている。そういう歴史的な経過があるんですね。ですから、そのあたりを踏まえながら今の問題を考えていく必要があるかなと思います。

さつき「学校選択の自由」とか、格差の問題とか出ておりましたけれども、現実に自分が卒業させた子どもなんかでも、「本当にこの子は頑張り屋だけど勉強はできない。だけでも高等学校に何とか入れば本当に頑張ってくれるだろう」と自分自身もわらにもすがるような思いで、その子に受験をさせて、うまくいかなくて、結局高校進学を希望しながら行けない生徒もありますし、反対にこの子はちょっと続かないんじゃないかなと思えるような子どもがうまく合格して、けれども結局中退をしてしまうとか、本当に自分自身でも矛盾を抱えるような面を幾つも見ておるんですけれども、中退のところをちょっと考えたときに、何で無理して高校に行くのかなということを考えるんですね。

そうすると、ともかくみんなが行く。九十何%が高等学校に現実に入っている。その実態でそれ以外の五%に入るといふのが、どういう意識で子どもたちや親がとらえるかということなんです。反対に五%しか高校に行かないで、九十何%がそれ以外だったら、堂々と高校に行かないで、自分は働

きたいから働くとかできるんでしようけれども、5%というふうに考えると、その子が、あるいは親自身が本当に最後の最後の貧乏くじを引いたみたいなの、周りから、自分がだめになったような、だめに見られるような、そんな意識がかなり強くあるように感じるんですね。

ですから、ともかくみんなが行くから高校に行く。そのみんなが行くというのは、ともかく自分だけがはずれたくない。自分だけが貧乏くじを引いたみたいで、ほかの子がみんな高校に行く。その中で自分だけがそんなふうに見られるのはいやだ。そんな意識があるのではないかというふうに思えるんですよ。

ですから、正直なところどうなるかわかりませんが、希望する生徒を本当に全員保障してあげられるように枠をつくってあげれば、逆に最初から高校に行くつもりの子どもは、「自分は高校は行けるんだけど、行く気がないから行かない」と堂々とやるのではないかな。親自身も「自分の子どもは高校に行こうと思えば幾らでも行けるんだけど、この子は働きたいと言っている。だから、この子は働かせます」と堂々と世間に胸を張って言えるんじゃないかなと考えるんですね。

もう一つは、最近はずちの学校なんかでもそうなんですけれども、外国籍の生徒が結構入ってきています。日本語を十分に理解しないまま授業もうまく理解できない。そういう状態で受験をしてしまうから、結局結果も思わしくない。あるいは障害を持っていると言われるような子どもたちなんかも、本当に十分にその能力が入試の場面で発揮されない。そうすると、そういう子どもは排除されていく。そういう現実もあるんですね。

ですから、長続きしないような人間が入って中退をしてしまうこともすごく大きな問題だと思えますが、同時に、逆に本当にこの子が入って頑張れるんだという子が排除されているという現実の問題もあるんですね。そのあたりの兼ね合いをどういうふうに考えていくのかなということを真剣に考え

ていかなくはいけなんじゃないかなと思います。

自分自身の考えとしては、本当に希望する子どもについてはそれを保障してあげられるような、そういう制度にせひしてほしいなと考えます。

○浅井 ありがとうございます。ほかにいかがですか。

○芝崎 芝崎と言います。

先ほど質問した内容にもかかわってくるんですけども、高校教育を考えると、いろんな揺れもあるわけなんです。中学校の教師として送る側から考えてみて、今の高校の教育課程を前提にした場合、果たして最後までできるだろうかという思いがあるわけです。で、送っていくわけですね。高校に行って、一学期の試験が始まるわけで、そうすると、中学校に帰ってきて「先生、これ、わかんないよ」「これ、どう考えたらいいのかね」というので聞きに来る生徒も何人かいます。そういう中で高校の教育などを話しながら、どうおくれたらいいかというこの話をするわけですけども、そういう中で先ほどの前の先生が言われたように、高校を望むということは現在の社会の中においてどう生きていくというか、収入を得るかということですかね、そのところに来ていくわけなんで、そのところが本當言うと、改革されないと真の教育改革、高校教育の改革にならないだろうと思うんですよ。それはさておいて、高課研から出されている問題がきょうは出てこなかったんですね。その辺のことも触れていくことが必要だろうと思うんです。そういう中でア・テストの問題について高課研のほうでは大体廃止する方向できているようですけれども、小・中の校長会のほうでは、それは反対というところを出しているようですね。そういう中で私は、ア・テストは早い時期にやめていくことを考えないといけないんじゃないかと思っただけなんです。というのは、選抜の資料として使うといったときからいろんな問題として反対意見はあったんですね。しかし、私は、これは全体でやるんだからいい



じゃないかという意見をむしろ持っていたわけです。しかし、現在ではボクシングにおけるアッパーカットではないんだけれども、この制度のために教育内容が、いわゆる偏差値体制というわけですか、教育全体が歪められてしまっているわけです。もうポディーブローでふらふらになってしまっているわけですね。ほとんど偏差値というのはどういう意味かわからない生徒であっても、前の前の方が言われたように、「この学校は偏差値は幾ら」と。

ことしはおもしろい質問があったんですけども、「新設区はどうやって偏差値を決めるんですか」と、こういうふうな考えで、偏差値というのは全然わからなくても「偏差値」という言葉だけを知っているというか、使うという状況があるので、これもア・テスト体制からきているのだらうと。これは神奈川県ではア・テストというので、全国的に言えば、業者テストを含めてきているわけなんですけれども、神奈川県でやめたからといって全部その教育が変わるとは言えないけれども、少なくともア・テスト体制をどう考えるか。偏差値体制を直すという点では、早晚これを変えていくことを考えていかなくはないけないだらう。

とすると、どういうふうな選抜が行われるかという中で、先ほども黒沢先生が触れたように、より小学区制にしていくということで、五、六校は多いのではなからうかと思うので、三、四校ぐらいまでに縮めていかなないと選抜できないだらうし、そういう中で地元の教育をどうしていくのかということとを全体的にもっと真剣に考えなくちゃいけないだらう。単位制高校そのものについてはいろんな批判があるわけなんですけれども、履修をしていくという点においては、高校の中における履修範囲といますか、そういった点で言うと、こちらで出していくのがいいのか、言っていけば権力側に取り込まれてしまうかといういろんな問題もあるんですけれども、そういった点も含めて考えていくべき時に来ているのではなからうかと思うわけです。

そういった点で、ア・テストに対してはどういう方向でやめていくべきかということもぜひ意見としては、高課研の中で十二月に答申を出すようですけれども、方向を出していかなければいけないのではないかなと思います。

○浅井 ありがとうございます。一つのア・テストに対する考え方、廃止する方向で考えていくべきだというご意見も出されましたけれども、それも含めてですが、いかがですか。

○加藤 今のご意見で、私はシンポジストでしたので、ア・テの話もいたしました。では、ア・テストがなくなった後はどうなるかということの問題がございますね。現在の比率は内申（成績）は五十%、学力検査（入学試）が三十%、ア・テスト（学習成績）が二十%、五・三・二の比率なんです。

ア・テストはなくなったらいいじゃないか。中二の段階で、ア・テストが少なくとも二割、五段階を九科、四十五ですね。二〇〇分の四十五は決まってしまうわけで、三分の一は決定するんだ。選抜資料の材料になるんだと。だから、廃止すればいいじゃないかというご意見は、じゃ、廃止した後どうなるかということなんです。そうすると、当然その二割どこかにいくわけです。配分比率を仮りにヒフティー・ヒフティー（五十%・五十%）でいったらどうでしょうか。そうすると、ただでさえ受験競争にあおられている子どもたちがさらに偏差値、俗に言うランクの高い、いわゆる「ナンバースクール」という言葉を昔よく使いましたね。そういうところを目がけて、さらに激化するおそれがある。それは他の都道府県をごらんになればもうおわかりのように、神奈川も確かに序列がございませう。しかし、それ以上に激化するのはいくら目に見えて歴然だと思えます。

したがって、私のア・テストは残すべきだというのは、そういうところも考えておる意見として加味していただきたい。先ほど高校の先生と中学校の先生のご意見の中で、究極的には小学区制のほうがいいんじゃないかなと、私の意見に近いかなと私は理解したんですけれども、究極的には小学区制

が最大のいろいろな問題を除去していく制度だということ、ただ、理想と現実とのギャップがございます。私も進路実務の担当を三年やっておりまして、痛いほどわかります。だからこそ黒沢先生がいみじくもおっしゃったように、中学区に移行し、私の中学区というのは、横浜段階でも研究会（浜教組の推進委員会のほう）などで五〜六校程度提案しているんですが、その五〜六校を、やがては地元の高校一校を育てようという形に進めていくという運動を展開したいという中でお話をしたい。

私たちはちよつと黒沢先生とご意見が違ふところがございます、個人的で申しわけないんですが、単位制高校と言われたので、ちよつとこの辺も言っておかなければいけないんですが、単位制高校は都立に山吹高校という高校がございます。私も行ってみてまいりました。これはいわゆる無学年制で、神奈川でも近い将来できるのはご存じのとおりです。しかし、これは文部省のいわゆる「特色ある高校づくり」の一環としての存在なんです。「特色ある学校づくり」というと何かというと、新たな序列を生み



出すということなんです。いわゆる普通高校何とか高校、その下の単位制の何とか高校、その下の職業校等々、我々はやってはいけないうランクづけを、新たな新しいランクができるということで、単位制は問題ありきと、中・高の制度検討委員会でも結論は出ておらないで、議論が伯仲しております。まとまっておりません。したがって、単位制はそういうことで、私は、高校は単層構造であるべしと、先ほど申し上げたように、子どもたちがどこの高校でも同じようにサービスが享受できるという中であるべきということを考えております。

ちよつと申しわけないんですが、あと二分いただきましたんですが、入試の多様化について、これみせひとも皆さんにお話をしたいことがあります。最近、学力のみの検査がよくないんだと。学力のみイコール格づけと。イコール偏差値、受験競争の激化。じゃ、別に変わるものは何かということ、学校の行動面、生活面、あるいはその他例えば部活で何とか大会に表彰されたとか、そういう形のものゝ点数化したり、あるいは評価をして選抜資料のかなりの比重に入れようという県が若干見えてきました。具体的に申しますと、茨城県あたりは具体的に点数化してしまふ。例えばあの子は性格が明るいから三点だとか、おまえはちよつと暗いから一点だとか、これは人格を点数化して、そうなってしまうんです。

入試選抜は、先ほど古川先生がおっしゃったとおり、私たちが言っているところは、本来は選抜すべじやないんです。強いて定員の問題、さまざまな条件整備の問題でどうしても選抜しなくてはいけない、必要最低限にとどめろというのが文部省の趣旨だった。そのころの文部省は偉かったですね。ところが、なぜか最近はずよつと難しい言葉で、「適格者主義」というのがございまして、高校の学力に見合った生徒を入れるということで、入試競争が激化してきたという流れがあります。

私も時間の関係で申しわけないんですが、以上です。

○浅井 教職員の方の意見が相次いでいるんですが、私も一人なんですが、「べき論」というところよりも、もっと本音で具体的に何ができるんだとか、例えば文部省の今の話もありましたけれども、国民に対しては一定のというよりかなりの正当性を持って今出されてきているわけですね。偏差値一辺倒の入試はおかしいじゃないか。これは極めて正当ですね。だから、もっと個人のいろんないいところを評価して、いろんなその子どものよさを評価して入試に向かうんだと。これも非常に正当性を持っているわけですね。

だからこそいろんな高校も子どもの個性に合わせてつくっていくんだと。自分に本当に合った高校というのをたくさんつくって、特色ある高校をつくって選んでいったほうが格差がなくなっていく。これも極めて一定程度正当性を持っているわけです。私ども「べき論、べき論」で日教組が文部省に勝つためしがないんですけれども、そういう意味では、では具体的に今の入試制度をどうするかというところを、極めてリアリティーを持った形でもっとも論議を深めていきたいなと思うんですけれども、いかがでしょうか。

○稲森 横須賀の稲森と申します。きょうは高校生の母親として参加しました。

今いろいろお話を伺っていて、加藤先生と中野先生は同じ学区で中学校と高校、つま、送り出す側と受け取る側、でも随分考えが——ちよっと私にとっては矛盾を感じました。なぜかと申しますと、やはり送る側は、先ほど違う先生もおっしゃいましたが、いろんな思いで送る。高校に行ったら、この子は何かなるんじゃないか。親もそういう思い。でも、そういうふうを送り出した子どもを受け取った高校側は毎日毎日指導に困っているという嘆き、私はこれを聞いていまして、何か変だなと思いました。どこか何かが狂っている。私は二人の子どもを育てながら、今の現在の状況では振り分けられることは仕方がない。ただし、学力で振り分けられているだけで、人間性は振り分けられるわけ

はないという確信を持って子どもを育てておりますので、双方ともそれぞれの学校で育ちました。

そういうこともありしますので、私は、先ほど渡邊さんがおっしゃった、教育云々ということで、じや、教育ということは何だろう。私は育ちの機会だと思っておりますので、高校だろうが、大学だろうが、いずれは生きるために社会に出るわけですね。そういうためには高校の先生、中学校の先生、私たち親、少し子どもたちに希望を与えるような大人であってほしい。つまり、私も、私の夫もそうですが、娘たち二人も、中学校時代、高校時代の先生の授業に、「あの先生はこういう授業をしたんだよ」ということを申しています。

今、この進路ももちろん大事です。私も大事だと思います。ア・テストを簡単になくしては、それにかわるもので中学校の教師はパニック状態、ただし、中学校の先生はまじめでいらっしゃいますから、方法を見つけてどこかにはめ込むと思います。それであつと気がついたときにまた今と同じような状況になるのではないかと思いますので、高課研の答申も含めて、もう少しみんなでいろんなことと考えて、子どもは人であるということをもう一度高校の先生も再確認をしていただきたいなと思います。逆発想して、子どもが何かを語る、受け取る場だということをもう一度考えていただだけませんか。でしょうか。

中野先生のお話を聞いていますと、指導の点数の分散を望んでいらっしゃるのかなとか、中退者のゼロのところとたくさんあるところの、それだけではないけないかと思えます。確かに「指導困難校」は大変だというのわかりますけれども、教文研にお願いがございませう。先週のこういう分科会で、「ナンバースクール」という言葉が非常に出ましたが、一度でいいです。そのナンバースクールの先生も前に座っていただきたい。それで議論をしてくださいたら非常にいい形の議論ができるのではないかと思います。私はそのように望みます。

以上です。

○浅井 ありがとうございます。

○中野 反論というわけではないんですけれども、少し言葉足らずのところがあったかもしれませんが、補足しておきたいと思います。

おっしゃるとおりだと私も思います。ただ、指導が困難だとか、入ってくる生徒に問題が多いということは私は問題にしているわけではないんです。今の「公教育」というのは同じ予算、同じ人員、同じ施設みたいな、つまり、建前としては平等なんです。しかし、その中身というか、具体的に送られてくる生徒、あるいはその学校の抱えている課題ということから言うと、例えば退学者の数に比例するような状況がある。そういう中で我々教員が例えば制度として超えられない部分をかなり持っていることを、これはやっぱり実感として私は思っているわけです。先ほどちょっと「希望者全入」みたいなことをおっしゃったので、これは大いに結構だと思えます。今年度私の学校だってすべてを受け入れたわけですから、これはこれでいいんです。

ただし、すべてを受け入れるということは、本音で言いますけれども、非常に大きな困難を抱えました。学校がまた逆戻りしたような状況になりました。しかし、これをどうやって解決していくかということになれば、今までの「公教育」の、今の格差がなくならないというふうに仮定しますと、格差が固定したままだということではいけば、一教員や一学校の組織だけでは太刀打ちできない大きな問題を抱えているということを、一つの事例として言ったわけで、それで我々が例えば生徒の指導を、授業を放棄しているということではありません。先ほど私が言った、小集団の試みなんていうのは、ある意味で言うと、いかに我々が引き受けた生徒を三年間の中で育成して卒業させていくかみたいなことを一つ追求した結果です。先ほど意欲のある・ないみたいなことがちょっと出てきましたけれど

も、これは非常に難しいです。要するに選抜する立場からすれば、誰が意欲を持っていて、誰が意欲を持っていないかという判断は今の入試制度の下ではできません。現在「高課研」でやられている議論や内容をみてもア・テスト論議は盛んですが、格差是正を抜本的に目指しているとは思えないですね。

一九九五年度には四十人学級が全県立高校に導入される予定ですが、これを三十五人、あるいは三十人、二十人、こういう形の方向に変えていく状況に、今あるかというとなかなかない。今の格差の中でこういう実態があるみたいなどころでお話を申し上げたので、ちょっとそこら辺が言葉が足りなかったかなと思っています。

○浅井 ほかにいかがですか。

格差と序列をなくしたほうがいいという意見がほとんどだったと思うんです。あつてしかるべきだとか、あつていいじゃないかという意見は余りなかったように思うんですが、もちろんそういう方もいられると思うんです。同時に東京の場合は、格差をなくしてきたことよって公立高校から東大進学者が減った。だから、もう一度もとに戻すんだというので、来年度からまたもとに戻るわけですね。単独選抜、有名校復活だという制度がまた来年度から導入されます。

そういう意味から言ったらば、格差と序列をなくしていくことをもし前提としたとしても、文部省もそこは今一定程度認めているわけですね。それが入試の多様化という形で、いろんな高校をつくって、いろんな特色を持たせて、いろんな特色があれば偏差値による比べ方ができないだろう。で、格差をなくしていくんだ。

それから学力一本勝負が得意な子にはそれでやればいい。内申書だけでとってもいい。ポランティア活動を一生懸命やった子はそれでとればいい。そういういろんな方法、多様性を使いながらやろう



としている。それが格差・序列をなくしていくんだということに対して、もし格差と序列をなくしていく方向だということを前提とするならば、それでいいのかどうか。違う形であるのかどうか。それは文部省が言っているところの問題はないのかどうかという論議をしていかないと、今、小学区制だとか、総合選抜制という言葉が出てきたんですが、先ほど私が言いましたけれども、どこまでそれがリアリティーを持って県民合意をつくれるのかという検証も含めて議論が必要かなと思っっているんですが。

今のところにこだわりませんが、時間もあと二十分程度で終わりますので、ぜひご意見をいただきたいと思うんですが、いかがですか。

○横田 横浜で教師をしております横田と申します。

私は、小学校の教師をしておりまして、今、六年生を担当しております。きょうは「神奈川の入試制度」ということで、今、六年生を持っていて、私学の中学を受験しようとすごく頑張っている子ども担任として受け持っておりますので、強い関心を持って参加したわけですけれども、きょうの先生方のお話を聞いて、やはり教育の問題というのはすごく国民的な課題だなということを感じました。

中野先生が受け入れた高校生が、小学校四年生、五年生の算数がわからずに自分たちはそこから後戻りをして個別指導に取り組んでいるという話を聞いて、今、私たちが授業をしている子どもたちに本当にわかる喜びとか、学習内容をきちっと身につけて中学校へ送り出すために毎日しっかりと授業をしなければいけないと強く感じました。

今、小学校で私たちが教えることが高校に行つてまで、後に引きずるような形で送り出してしまわなければいけないほど大変多忙になっている教職員の中身とか、学習内容とかということが、本

に何年も先の子どもたちに響いているということ、中学校の先生方の指導というのもすごく大変かと思えます。けれども、子どもたちが、自分は中学に行ったらこんなことをしてみたいんだ。高校生になったらこうしたいなというような、一緒に希望を語れるような明るい見通しを、一緒に語れるような先が見えることを私たち大人が切り開いていかなければいけないなと強く感じましたし、それには中野先生が二十人と四十人では違いますよというお話で、やはり少人数のクラス編成とか、中学校も、高校も、小学校もみんな定員増で、ゆとりある学習を進めたいという私たち教職員の願いは国民的な願いではないかなと、きょうのお話を聞いて強く感じましたので、発言をさせていただきます。どうもありがとうございました。

○浅井 ありがとうございます。ほかにいかがでしょう。

○山下 横須賀市衣笠中学校の山下です。

何点か話がまとまらずに話すとは思いますが、保護者の方の渡邊さんの話を聞かせていただきまし



て、家庭の中で進路にかかわって現場では見え切れない部分を聞かせていただきまして、非常にうれしかったので、私も親なんですけれども、親の姿勢、家庭の教育力は渡邊さんのところは大変素晴らしいものがあって、私自身もそういうところは見習っていかなきやいけないんじゃないかなというところをまず一つ思いました。

二点目は、同じ中学校の加藤先生のお話の中で、ちょっと私としてはきらいな部分があったのでお話をしていきますけれども、加藤先生は、十五歳では落としてはいけないと強い言い方でしたわけですが、その補足の中で「輪切り」はしていませんというような言い方をしていますけれども、ああいう強い言い方でしまうと、親にしてみれば、「輪切り」じゃないかと思われんじゃないかなと思います。それから、先生がそういう意識であれば、多分子どもに対しても厳しい指導で進んでいくんじゃないかなと思います。子どもに選択させているとは言いながらも、何か厳しい指導をしていくような感じが見えますので、私としては、今の子どもたちは昔の子どもたちと比べて考え方もかなり広いですから、落としていいという言い方ではないですけれども、落ちてもいいという考え方を持っていないかなきやいけないんじゃないか。

ただ、指導としては、親と子と教師で、その方向に関してはしっかりと話し合っていく中で進めていかなきゃいけないんですけれども、落とさない指導よりは少し意識を変えたほうがいいんじゃないかなと思います。

もう一点、実際今こういう高校入試の問題は非常に大きくクローズアップされているわけで、私自身が思っているのは、中学校からは子どもが出ていき、高校は受け取るという感覚ですけれども、この機会に中学校の教師と、高校の教師がもっと話し合う機会が必要ではないかなと思います。

私の所属している三浦半島教職員組合では、高問協という形で地域の高校の先生との会合を持って

いるんですが、なかなか機能できない。この前も二十一日にやっただんですが、その中で神教組と神高教で例というのか、対策として地域の高校の教師と中学校の教師が話し合える機会をつくってしまつたほうがいいんじゃないか、そういう話も出ました。ですから、子どもはただ中学校から高校へという場所だけが変わるわけで、その子ども自体は変わっていないわけですから、中学校の教師と高校の教師が本当に本音を話せるような機会が持てるような状況をつくらないと難しいんじゃないかと思えます。

以上です。

○浅井 中・高との接続という意味では、まず教師同士のどういう連携から図られるかというご意見だったと思うんですが、そこをつくっていかなければというご意見だったと思うんですが、ほかにいかがですか。

ぜひこの機会に、何か腹が膨れるような思いで帰ってもあれですので、ご意見を出していただいて、それをもとにきょう参加された方々がうちに帰るなり、職場に帰るなり、さまざまな場でこれをもとに高校入試制度についての議論が起きていけばというふうに主催者としては思っているんですが。

○須田 川崎の小学校の教師で須田といいます。

きょうは、いろいろ意見というより母親の立場でちょっとお話をさせていただきたいと思えます。中学一年になる息子がおります。きょうのタイトルからすると少し次元が低い話だったり、ずれているかもしれないんですけども、結論は、中学受験というのを切り離しては考えられない問題だなというのをつくづく感じていっているということを言いたいですね。

私の子どもが小学校五年生になったときに、学級の中で多少いろいろ問題もありまして、「公立中学にはこのまま行きたくないから受験をしたい」ということを言い出しました。それで、「あなたがそう

いう気持ちなら」ということで、近所にある塾に行ったわけですが、すごい、すごい、すごい、すし詰め授業で、結論としては結局二ヶ月でやめました。本人の様子を見ていて、こちらとしてはもう見るに見かねて、また二度目も子どもに従ったわけなんですけれども、「ボーキサイトの世界第三位の生産高はどこだ」というテストがあったんですね。ダイヤモンドや金の第一位くらいだったら小学生として覚えていなきゃいけないだろうと思っただけなんですけれども、ボーキサイトの三位なんて何で必要なんだろうと母親として思ってしまったわけなんです。

そういうことをくぐり抜けていった子たちが結局私立の中学校に入りまして、六年間というコースに乗って多分有名大学に入るだろう。その子たちが日本を牛耳っていくんだなということを感じたときに、ものすごく怖くなりました。そして公立の中学校に行った子どもたちは本当に喜んで公立に行っているのだろうか。公立に行った子たちは心のどこかで私立に行けなかったという辛い思いを持っていないのだろうか。私はそういう子どもの経験を持った母親としてかもしれないけれども、ちょっと辛い思いで中学の入学式の日を迎えました。おかげさまで子どもは大変喜んで行っていますし、部活も喜んで参加しておりますので、子どもの様子から見るところで何にも不満はありません。

しかし、今のこの日本というか、私が見える範囲の神奈川県の中で私立のコースが一本あって、そして中学の公立のコースがあって、また中学からさらに公立の高校であるとか、私立の高校であるとか、たくさんのコースがあるわけですけれども、そういう中に学歴社会ではない、子どもは一人一人本当に伸び伸び生きさせていかなければならない。自分の人生を大事にしなければならぬ。本当にわかっていることではあるけれども、心のどこかに私たち大人は学歴はあったほうがいいし、いいところに行かせたいというのもあるかもしれない。そういう板ばさみの中で仕事をしながら、子どもを育てながら悩んでいきますし、今も悩んでいるところです。

ですから、高校入試は本当にいろいろな問題を抱えていますけれども、法律だけで悩んでしまうところか遠いところで大きなものが動いているような気がして少し怖いなと感じているわけなんです。

以上です。何かまとまりませんで。

○浅井 ありがとうございます。高校入試制度問題の中では最も抜けてはいけない私立の問題も今お話がされたと思います。

時間としてもうおひとりぐらいしかないんですが、どなたかいらっしゃいますか。

○赤尾 帝京技術科学大学というところで教育学を講じています赤尾でございます。

きょうの議論を聞いてみて若干気になった点をお話しさせていたきたいと思います。今、そちらの先生のほうから私立の問題が出てきたわけですが、きょうの話の中では、私立の中学・高校の問題がどうも触れられていなかった。あくまでも公立の中学・高校の問題が扱われていたわけです。その中で特に学校における序列・格差は絶対認めないとか、「学校選択の自由」は認めるべきではないとか、あるいは単位制高校もコース制はだめだとか、そういうふうな中で特色を出してはいけないとか、そういうふうな形にもしこれから公立高校がなってしまうときに、こういったような高校に本当に子どもたちが喜んでいけるような形になっていくだろうかということ、このことは非常に私自身は危惧しているわけがあります。

私は、実は東京の世田谷に住んでいるんですけども、世田谷では私学志向というものが非常に強くなってしまうている。それは多分加藤先生がいらっしやる青葉台とか、田園都市線の沿線とか、あるいは川崎とか、そういったところにもう既に、小学校を卒業して東京都内の私立中学とか、中学を卒業して東京都内の私立高校に行く。こういったような形でどんどん公立から逃げてしまっている、そういう状況があるんです。

そこで私は思うんですけれども、子どもたちにとって魅力のない公立高校であるよりは、むしろ単位制高校とかいろんなものを作って、確かに序列につながっていくのかもしれないけれども、しかし、そういった中で特色を出して行って、公立高校同士で競い合っていく。こういった観点は必要なんじゃないかなという感じがするんです。

そういう意味で、これから神奈川県でも、近い将来、十年ぐらいたつてくると、多分そういったような形で私立志向みたいなものが強くなってくるんじゃないか。そういうときにこれからの公立の中学、高校のあり方は当然問われてくるだろうと思うんです。そういう意味で中学や高校の先生方に頑張っていただきたいなと思います。

○浅井 ありがとうございます。

では、最後には二分ほどしかできませんですが、シンポジストの方からきょうの感想も含めてですが、言い残したこともあろうかと思しますので、逆に今度は黒沢さんのほうからお話があればお話しただけですか。

## ま と め

○黒沢 高課研のことで私の考えから言うと、学区制をどうして論議しないんだろうかと非常に不思議に思うんですね。高教組の代表の方に聞きますと、とてもそういう雰囲気ではないと言っていますね。ということは、きっと県民の中になかなかそれを問題としないような流れがあるんじゃないかなと思います。私は非常に残念だと思います。けれども、これからでも遅くはないので、格差が病因だった

ら、それを治すことの議論はしてもらいたいなと思うんですね。

もう一つは、制度だけではなくて、学校のソフトの面をもう少し、私も教員の端くれですけれども、教員を含めて考えてもらいたい。たとえば、先の能力ということも本当に我々が今まで考えていたようなことでもいいのだろうかということも関連します。実際に差異があるわけですね。学力的に落ちる人が、現在の中で大企業とか、エリートとかを中心に、目標にして考える限り、幾ら頑張ったってその差は縮まらないと思うんですよ。そういうことを考えると、「エリートなんかにならなかつたって、俺はちゃんとした仕事をして生きていくんだ」と、ちょっと語弊があるかもしれないけれども、お父さんの仕事を継いでやっていくんだ。何も大企業なんぞへいかなかつたって、そんなところに行かなかつたって俺はちゃんと生きていけるんだ。そういう人間を少しでも多くつくりたいのです。

それをもう少し小さいときから、エリートでなくたつて普通の庶民で、市民としてちゃん生きていけるんだという教育を果たして戦後教育はやってきたんだろうかと、私は考えざるをえません。大企業中心の、一元的なライフスタイルみたいなものを転換してほしいのです。そういうことを私は先ほど能力を考えなおそうという問題で提起したわけです。

誤解される面があつたと思いますけれども、一言だけ補足しました。

○渡邊 きょういろいろとお話を聞いていて、子どもの失敗を大きな成長と思つて受けとめ、失敗を喜んであげられる親でありたいなと強く感じました。以上です。

○中野 言い足りないところもあつたんですけれども、一つ、私は、いろんな生徒とつき合う中で考えているのは、先ほどどなたかがおっしゃったように、リターンマッチといえますか、中学時代の例えば一度の失敗、高校時代の一度の失敗、そういうことも昔はよくありましたよね。例えばたばこを吸つたりいろんなことをやつたり、でも、多分いろんな人生の中で育てられて一人前の人間になつて



いくみたくないな、そういう緩やかな社会というのが日本には古きよき伝統としてあつたんじゃないかと思っただけですね。

ところが、今の学力による価値の一元化の中で、寛容というか、緩やかというか、そういう「ふところ」の広い社会というのがなくなってきた、人を見ると、どここの学校・大学、あいつはたばこを吸っている、あいつは髪の毛が赤い。そういう一度の人間の失敗みたいなものもリターンマッチも許されないような社会というのができ上がっているんじゃないかということを非常に切実に感じます。といいますのは、ひよつとしてこの子はいろんな形でやってあげれば、学校として多分引き受けてくれるだろうと思う子どもたちでも、例えば私たちの学校ではなかなかそこまで手がいかないで、するりと手からこぼれ落ちてしまう。こういう虚しさをいつも感じているので、そういう「ふところ」の広い学校ないし社会みたいなものがどうやって築けるのかというのを、我々が知恵を出し合って、大人の責任として考えていくべきじゃないかということを近ごろしみじみと感じています。

○浅井 最後に加藤さんのほうからお願います。

○加藤 十五分という持ち時間で、いろいろ私の意見が申し上げられなかったことで、いろいろお答えになると思います。ただ、何度も私がさつき申し上げたところで、「十五歳の春を人生の岐路にさせてはいけない」ということをご理解していただきたいんです。強い指導は全くありません。「十五の春は人生の岐路にさせてはいけないんだ」と、それをご理解いただきたい。それが私どもの原点じゃないかなと思います。

それから、最終的には何といっても小学区制にせひ移行していくような努力をすべしと、私は原則論者ではありませんが、それを最終的には目標にすべきで、そして先ほどあちらの小学校の女の先生もご意見を言われたとおりに、やはり学級の定員減ですね。今、小学校、中学校は四十名、高校も四

十名になろうとしております。でも、それをたしかスウェーデンあたりでは二十数名で二人教員がついていて、木造建築だという、その辺のところから発想を転換していかなければいけない。それこそ発想を転換しなくてはいけないのではないかなと思います。

二分の持ち時間なのであと一点ですが、今新たにいろいろな県でいろいろな取り組みが行われています。私は夏に進路指導推進委員会のメンバーと宮崎県に行つてまいりました。それは公立高校普通科に推薦制三割を取り入れる。三十％は推薦制で入学させるんだと。これもさまざまな問題があります。あるいは茨城では行動面を点数化する。愛知県では複合受験といひまして、公立を二回受ける。さまざまな形で、正しく文部省の考えているような多様な方法が考えられている。しかし、これは大きな問題を抱えている。やっぱり我々、私も含めて勉強しなくちゃいけないと思います。

最後に、私は十九年目になろうとしています。ある校長が私が転勤するときこう言いました。「大学を出ている教師は、本当はオール一の子どもの気持ちをつわらないんだよな。」「君は、どう思う」と。この言葉に教育の原点があるのかなと思います。

話が長くなつてすみません。以上です。  
○浅井 ありがとうございます。

参加者の方々にまだまだたくさんのご意見はあろうと思いますし、お話し足りなかったところが多々あるかと思いますが、司会のほうの不手際も含めておわびを申し上げます。

きょうは二時間半にわたつてシンポジウムを行わせていただきましたけれども、私のほうから下手なまとめをするまでもないとは思ふんですが、今、「神奈川の入試制度を問う」というタイトルをつけましたが、お話の中でも出てきましたように、県教委の諮問機関である高校教育課題研究協議会がこの十二月にも神奈川の入試制度をどうするか。「神奈川方式」の改編ということも新聞で報道されてお

ります。今まさに全県民の課題に入試制度がなってきたという時代だと思えます。

一番私たちの願いとしては、入試のない、誰もが行きたいところへ行ける。これが一番の理想だと思ふんですが、なかなかそうならない現実の中で、具体的な入試制度がどうあるべきかということを引きよの課題として設定させていただきました。討論としても不十分なところが多々あると思ひますし、今後さまざまな場面でこれを継いで、それぞれの方が議論をしていっていただきたいし、またさまざまな提言もしていただきたいと思ひます。

私ども神奈川県教文研が主催しましたので、ぜひご意見等もお寄せいただきたいと思ひます。

きょうは土曜日の午後という中で、普通ならばゆつくり過ごしたい時間ですが、たくさんの方においでをいただきました。感謝を申し上げます。シンポジストの方につきましても、大変ありがとうございました。

これで閉会とさせていただきます。(拍手)

○司会　うちの研究所はごらんのとおり神奈川の入試制度、それから不登校という二つの柱をずっと長く、と言つてもまだ四回ですけれども、開催してきました。そのうち二回が「不登校」、二回が「入試制度」ということで、二月には川崎のほうで「不登校」をめぐるパートⅢということをやつていきます。これをただ一回のシンポジウムに終わらせるのではなくて、こういう記録集にしたり、または今回の中間報告もきちんと最終報告でまとめる予定でおります。皆さんの感想も記録集のほうに載せたい思つておりますので、ぜひお帰りの際に感想記録用紙を提出して下さい。

次回の開催は、来年になるかと思ひます。前回、そして今回の討論をまた検証しながら、恐らく入試制度に関する三度目のシンポジウムを開くことになると思ひますので、その節にはまたおいでを願ひたいと思ひます。



最後に閉会の言葉ということで、本研究所の教育改革研究委員会の部長をやっております関東学院大学の富山和夫先生にお願いします。

## 閉会の言葉

○富山 紹介を受けました関東学院大学の富山でございます。

きょうは、土曜の午後のお忙しい中、三時現在で大体四百名という非常にたくさんの方にお集まり願いまして、この会を盛り上げていただきましてありがとうございます。

この会は、私どもが主催いたしましたけれども、先ほど所長からごあいさつを願った横浜市教育文化研究所、神奈川県高等学校教育会館・教育研究所の二つの機関が共催していただきました。それから協賛ということで横浜市教育会館がこの会場を無料で貸していただきました。それから神奈川県教育委員会、横浜市の教育委員会の二つの教育委員会から

も後援ということで参加のための手助けをいただきました。

話を聞いていまして、この問題は非常に難しいということがわかりました。高校の話だけでも、その背後に大学入試の問題とか、学歴社会の話があったり、あるいは先ほど話がありましたように、高校入試ではなくても、もうちょっと前に私立中・高の入試というか、私立学校の入試は高校ではなくて中学のほうがむしろ本番でございますので、そういう全体の日本の抱えている教育問題の中の一つの断面を取り上げているわけで、論議が難しく、いろいろまだ未整理のところもあるかと思いますが、この記録は先ほど司会者が言っておりますように、テープをおこしまして、記録として残していきたいと思っております。

本当に最後ですが、きょうのシンポジウムの主役としてやっていただいたコーディネーターの方と、四人のシンポジストの方に、皆様から拍手をいただきまして、閉会にさせていただきますと思います。

(拍手)

—閉会—

参
加
者
感
想
文

★・中三の受験生を持つ母親です。テストの一点一点に敏感になって止むを得ないものは感じていますが、行動・特別活動なども内申点をよくするために、頑張つて(?)います。部活や文化祭の参加の仕方まで評価され、帰りはおそくまで学校に残り、夜はおそくまで勉強しています。感受性豊かに育つ時に、本もろくに読まず、友達との付き合いもほどほど(部活では、けっこう仲良くなれたようですが)で、バランスのとれた人間に育つだろうかと思つてしまう時があります。まだ、小六と六才の子どもが下にいます。是非、子どもに納得のできる入試の方法が見つかることを期待しています。

☆・母親の素直な気持ちだが、私達母親の言葉を代弁されているように思えました。先生方のお話より感動しました。私も息子の受験で同じ様な経験をしましたので、身につまされました。

・神奈川方式には一長一短あります。十五の春を泣かせないということもよくわかります。しかし私は、義務教育の期間は人間の基礎(心身共に)を作るという意味から、もつとのびのびさせたいと強く思っています。高校が義務化され地元の高校に通い、地域のものとなることを望みます。児童生徒は、国の宝と思ひ、地域丸抱えで育てるべきです。入試選抜は、大学の時(高卒の時)子ども達が真に自分のことと考えられるようになった時やれば良いのです。今子ども達は、単に大人の敷いたレールに乗せられているだけのようない気がします。中学校高校では、人間教育をやるべきです。自分で判断できる力を先ずつけることが大切です。

☆・私の息子の場合は、中学の先生に、この成績ではこのことここといわれました。どこも本人の行き

たくない学校で、大変困りました。ア・テスト、学校の成績で決められました。中二、学校生活の内申書が、中学の先生の目で書かれます。担任の先生に成績の悪い子と見られるとよいところも見てもらえません。いわゆるよい子と見られると内申書もよくなります。しかしよい子でも、先生の前での行動と先生の目の視線にないところでの行動は違います。影での行動は目をおおうものがあるにもかかわらず先生の目にとまらず、成績がよいために行動面までよいことになることが大変多いことをよくみています。私は内申書に絶対反対です。入試の仕方を変えてほしいです。大変ですが、面接テストと、子供の個性が生きるような学校を選ばせてほしいと切に希望します。高一、一学期より二年始めまで、すごく「ぐれ」ました。二年になって担任が変わり、三六〇度変容したことはとてもうれしいことでしたが…。

・教育関係者の意見が多くて、親としての意見が言いにくかった。

☆ 実際に経験された上での話が多く、わかりやすかった。

・我が家にも中二と高一の娘がおり、昨年度は、親子で胃の痛む思いをしました。来年は又…と考えるとゾッとしますが、子供自身が行きたい高校（学校）へ行けるように応援（？）したいと考えています。

・神奈川方式が良いか悪いか決められませんが、親としては格差がなくなっしてほしいナと思います。

・今日は、参加させていただき、本当に良かったと思います。

☆ 娘が高校受験をするという時になって初めて、神奈川方式というのを学習し理解した次第です。

今日、いろいろな方のご意見を伺って、教育の持っている問題がいかに大きいか感じた次第です。

・「人間のライフスタイルを変えていく」とおっしゃった黒沢先生のお話が非常に心に残りました。小学校から、人間として生きていく上で何が大切なのか、くり返し指導するとともに、大学制度の

あり方を上から変えていくという二本立てで行っていくことが大切と思います。(横浜・一母より)

☆・高一と中一の息子と娘の成長といっしょに、受験の問題、学校の問題を考えています。今年はじめに高校受験を経験し、説明会・入学式に自分の息子も当然含め、実に似かよった子ども達の集団をながめ、輪切りとはこういうものかと、現実をまざまざと見せつけられた思いをし、そらおそろしい気がしました。けれど半年たった今、親としては、この学校で息子は何か生き生きとしている、何か自分をためそうともがいていることも感じています。様々な人のいる中で、様々な刺激を受けて育ってほしい親の思いと、その中の一人一人がそれぞれ集団の中にもまれてしまうのでなく、個々に対応できる学校側の体制をもかねそなえた高校を望んでいます。もつともつと、教育にはお金がかかることを行政はわかってほしいと思います。

☆・神奈川県の入試制度、ア・テスト二割、内申五割、入試三割、この制度の改革がなされるよう望みます。特に内申につきましては、教師個人の私見が多く入り込み(態度・意欲・進度等)のように評価するのかわけのわからないことで、それによって実際に試験の点数を取っても評価が下げられたり、またその逆のこともあって、良い思いをする者悲しむ者を生み出しているのが現状です。また入試は、公立中→高校へという時、密室の中で行なわれており、「うちは推せんをもらったの」等、一般にはどれだけ推せんがあったのかも公にされなまま行なわれているという現状です。神奈川方式は、ほんとにいやです。(三児の母)

☆・二月二十七日逗子に続いての参加です。この半年余りの世の中の変化を、多少感じました。ただ同じだったのは、子どもへのいたわり、真の愛を感じなかったことです。なぜでしょうか。

・大人が思う程子どもは愚かではない。今子どもがどう生きてどう動けるか、この国の驍ですとおっしゃった作家がおりました。深く受け止めたいことばです。



・シンポジストをもっとバラエティーにとんだものにして下さればもっと嬉しい。

・高課研答申前にもっともつと議論したいものです。

・学区制をもつと詳しく、全国全国のデータを知りたい。(稲森 文子)

☆・三人子どもを育て、大学高校中学とそれぞれ三年の子がいますが、教育のむずかしさを感じます。教育世論をおこさねばならない時期だと思います。塾のない、学校での教師と生徒との間が接近できるよう、二十人学級かな？

・既成の進学レベルにのせない教育をつくしたいと思います。

☆・たいへん大きなもんだいですが、興味をもってきかせていただきました。これがどう実際に話がかされていくのかなと思います。中学の息子は、このままで卒業してしまいました。

★・私は教育学を選択している大学生です。私も神奈川県に育ち、ア・テストを受けてきました。中学校に入って一番思ったのは、自分が本当にやりたい事が何だかわからなくなりました。何か制度に流され、勉強してきたように思います。子供を主体に考えていってほしいです。

★・田奈高校の中野先生の率直な態度とことばに非常に動かされました。きれいことは世の中にはいくらもあるし、特に私が勤める小学校はきれいことだらけで、特に校長さんはきれいこと推進委員長のような人です。民間企業に八年もいて、世の中のきたなさと矛盾にどつぷりとつかってきた私にとって、背中あたりがかゆくなることばかりです。本日は、「それ見たことか、世の中にはこんなに矛盾があるじゃあないか」と思う気持ちを強くしました。やはり、小学生にも世の中の矛盾を提示していく必要があるのではないかと思います。その現実をふまえて、本当に人生設計を考えるべきだという思いを強くしました。大企業一番の日本は、完璧に変ですね。数学がよく出来る人間が「ぼくはろくにくぎもうてなくてはずかしい」と本気で言えるような世の中にしていくな

ろうと思っています。(きれいなことです)

☆・神奈川方式に関わる現状を、各立場にあるシンボジストの方々の報告によって様々な観点からとらえるよい機会であった。学力や学校間格差に対応するための基本的な考えと現状の中にある問題(矛盾)を知ることができた。

・小学校に勤務する立場から、児童指導を将来的展望に基づいて構える必要を痛感している。進路指導は人生指導であるという根本的に大切な考えである反面、塾通いの多いその背景に合致するように進学指導的にややもすると陥っている小学高学年時の指導に反省している。ただし、学力・能力差が生じている背景に多くの要因がある。できない児童をできるようにする努力はしているが、どのような努力をするか、その方法についても是非が問われている現実を見つめると難しい。

・学校制度を問うのも大事だが、個の尊重と自立を重視した特に目的観をしっかりとせ、高校へ行かなくても自分の道を進められるような受け皿(例・各種学校など専門分野)を子供も大人も社会も意識して持つて当たるべきだろう。

☆・小学校の教員として、小学校の中学年の頃から、クラスの中でもはつきりとした差はできている。工夫して教えるようにも、放課後残して教えたり、ゆっくり習得させたりする余裕はない。(これは、私が就職して以来十八年間ずっとである。)小学生は、学習以外のこと(行事とか)に力を入れるが、現実には、テストで点数をとれねばどうにもならないという現実を無視し、理想論のみを実行している。田奈高の先生のやりきれなさはよくわかるし、ご努力に敬意を表する。学歴社会を変えられないなら、小学校はもっと点数の取れる児童を育てる努力をすべきだ。結局、児童がつかい目にあうのである。ただし、学歴と経済力だけで人は幸せにはなれないのだが。

・動員で、いやいやながら来たのですが、今日は大変勉強になりました。ありがとうございます。

☆ 小学校六年担任。卒業を半年後にひかえ、何かすてきな思い出を残してやりたいと必死になる教師。その反面、少数ではあるが中学受験で必死になる子どもと親。

・新指導要領では「生きる学力観」ということが叫ばれている。「あまり点数にこだわらない」といっても、親は「そうはいっても中学・高校は点数が勝負なんです。社会が変わらないかぎりどういわれてもしかたないと思います」個人懇談での親との会話。うまく説明できない教師です。

☆ 小学校教諭の私には、全くといって良いほど興味関心が薄かった。しかし、今回シンポジウムに参加し改めて小学校教育の重要性を感じる。

・高校教諭のシンポジストの方がおっしゃっていた「〜511〜」については、小学校の時点で、多くの個人差が出てきてしまっているのも現状であると思う。

☆ 横浜市の小学校に勤務しています。今六年の担任なので、あと三年後、受け持っている子どもが一番大きな問題となることなので、興味深く聞きました。

・高学年では様々な事情により学力差はかなりあります。個別学習の必要性も言われております。中学高校ではどうなのだろうと思いましたが、どの中学高校へ行っても、子供（生徒）が満足するためには、その子にあった学習が必要になってくるのだろうとも思います。受験するということは、どの子も高校へ行きたいからだと思います。

・課題集中校という高校が、最も子供（生徒）にとって素晴らしい場所（学校）になりえるところだと思っています。

・小学校教育の大切さも感じました。どうもありがとうございます。

☆ 小学校教員です。自分の子ども（小四・小一）の成長を見ると、ア・テスト・高校入試など、自分の時と同じ様に単純に考えていました。学力格差の考え、肯定的にとらえていました。もっと

もつと考えていけないかと思いました。(小学校教員としても、父親としても)。もつと長い目で子ども(児童)を見つめて育てていかなければと思います。

☆ 横浜の小学校教師として、中二の子を持つ母親として、本日のシンポジウムを持って参加しました。  
 ・ 中学校も高校も通学するだけのものなのかという印象を受けた。小学校も中学校も高校もその時々子どもは生きている。充実したその時々を過ごさせたいと思う。

・ 「学力」の考え方について、小学校では、意欲、関心面を含めて学力ととらえる方向になっているが、本日の話し合いでは、学力は試験で点をとれるもの——知識——を学力としているが、話し合いの根本となる「学力」のとらえ方が統一されていないのではないか。

☆ いろいろな立場の方のお話を聞けて、大変有意義な会でした。私自身、小学校の教師と中三中一の子の母親の立場と両方から考えることができました。

・ 教育本来の姿にもどせるよう、社会を変え、教師・親共に、これからも考えていきたいと思いません。

☆ 大変よかった。自分がいかに低レベルでの感情にとらわれていたかわかった。その感情の持つて行き場のない親も多い。

・ 中学、小学区レベルで、このようなシンポジウムがもてるとすばらしいと思う。

・ また、障害児についてもふれられていたが、まだまだ提案がほしい。(中三、小六、小三の親、小学校特学担当)

☆ 参加者の方々の意見も真剣な内容で、すばらしいシンポジウムでした。いろいろな分野の方々の話し合いの意義を感じました。

・ 子供も人間。これからの社会の大切な一員。いろいろな分野をになっていくんだと考えた時、ど

んな市民に育てていくか」という視点で小中高教育も行なっていかなければならないということを、痛感しました。

・新しい学力観に立って教育をすすめているはずですが、まだ一人一人のよさを生かした教育が浸透していくのには時間がかかるんだと思います。がんばりたいです。(小教員)

☆・小教員として、また、中三の子供を持ち、今受験の真つ最中にある母親として、お話を大変興味深く聞きました。

・特にここ一年間、教育・高校入試などの是非論、ア・テストなど大きくゆれ動いている時ですの、中学校の先生方に面談を受けても、今ひとつあいまいで、不安な毎日です。

☆・中高の実情を知り、その基としての小学校の学力をきちんとつけさせたいと、小学校の教師としては思う。現に算数は九九もできない六年生もいる。

・現在の小学校では、生き生きとした一人一人を大切にしたい学習を考えているが、入試制度が子ども達の精気を失っていく元になっている。

・小学区制やゆとりある一つ一つの学級指導(人数的にも時間的にも)が、一つの解決の糸口になるのではないか。

・まだまだむづかしいと思うが、家庭と協力して一つの力として、改革の方向に持っていくべきだと思う。

☆・小学校の立場から大変参考になりました。パネラーの方々、それから他の中高の先生方のお話を聞いていくつか思ったことがあります。一つは、学力の問題です。文部省では今回の学習指導要領で、学力について、知識理解に重点を置くのではないとの意見を出しました。しかし、今日聞いている限りでは、学力についていまだに知識理解に重点を置いて考えているように受けとりまし

た。今後、学力についても考えていただければと思います。また、今ある塾についてどう考えているのかも論議されてもよいのかと思います。

☆・小学校の教員です。実はテーマそのものがあまり直接的には関係がないと思っていました。いわば、動員の義務としてやってきました。ところが、四人の先生方のそれぞれのお立場から神奈川方式についての見解・問題点を指摘していただき、小学校を含めて考え直さねばならないという気になってきました。大変参考になりました。

・きょうは、保護者の方の体験談に感動致しました。自信喪失から自己嫌悪に陥りながらも克己し、立ち直られたのは、家族の方の実に適切な励ましがあつたからだと思います。日頃の家庭教育の本筋の通つた、しかも温かい支えが、本人の意識改革を促したものと思います。「コネはお断わり、就職したければ他へ…」の励ましは、甘えを断絶させたすばらしい励ましのことばであつたと思います。小学校も今たくさんの問題をかかえ、小一から甘えの不登校がふえています。必ずしも管理体制からでなく、家庭自身の甘えが目立ちます。

☆・シンポジストの方々ありがとうございました。話し方・内容等わかりやすかつた。

・結果が良ければ良いと受け取られ、悪くでれば悪いと受け取られますが、やはりいろいろ考えながら、どの方法がよいかというのが出てくると思います。

・小学校でも学力差が大きく、担任としては悩み事ですが、それが高校までひびいているということ、とても大変だと思います。

・今後、先生方、色々調べ等なされ、よい入試制度を考えていってください。

★・中学三年の担任をしています。加藤先生の話の中に、「輪切りの進路指導をしてない」という話でしたが、実際は、本人や親に、つらい輪切りをしています。

・小学区制、平均化した高校、地元の高校へ、全入学できるように願います。そうして、生徒達に明るい中学校生活を送らせてあげたいと願っています。

☆・みなさんの意見をきいてびっくりしました。中学校で働く私は、今一時のゆとりもありません。分掌の仕事一つ終われば、また次が待っている。二学期が始まってゆつくりねることがありません。毎日徹夜に近いのです。そんなに忙しくて、今日のようなことを考えたり意見交換したりするゆりのないことを悲しく思いました。今中三の担任です。来週は三者面談があります。よい刺激になりました。

・子ども達と心から語り合える教師になりたいし、そういうゆとりがほしいと思いました。また、どの親も本当に子供を愛してほしいと思っています。その辺も問題のように思うのです。

☆・小学区制にぜひ戻してほしい。(私は高知県で高校時代を過ごしました。)

・そこにすぐは戻せなくても、内側で、学校独自の教育を作り出していけたらと期待します。そのためには中野先生も言われたように教育費(定員増)を確保すること。後期中等教育の中身をどう作っていくかを、ぜひ考えたい。(中学教師です)

★・希望者全入など高校入学の方法が変われば別であるが、いかなる方法であれ、選抜という方法が存在する限り、原則的には神奈川方式は堅持すべきである。ア・テスト・内申書に対する問題点の指摘の殆どは、ア・テスト・内申書の問題ではなく、高校入試そのものの問題点であり、むしろア・テスト・内申書を入試に利用することは、この問題点解消に役立っている。しかし、高校入試の矛盾が大きすぎて「神奈川方式」でも負の部分が解消しきれず、それがア・テスト・内申書に対する誤った知識と共に「神奈川方式」に対するゆがんだ批判となっている。高校進学にあたって選抜という方式をそのままにして、アテストを選抜の資料からはずし、高校側の学力検査のウエイトを

大きくすることは、決して中学校二年生を高校入試から解放することにはならない。出題の領域程度殆ど無理のないア・テストでも、選抜の資料として使われることにより問題は生じているが、競争試験である選抜試験は、当然、領域・程度とも、中学校教育に悪影響をもたらすであろうことは、過去の例からみて明らかである。ただ、現行の「神奈川方式」で三つの資料の整った者を第一次選考の対象者とし、それを八十％としていることなど、更に検討を必要とするであろう問題は多々あることはいうまでもないが、(高校教育会館、教育研究所 杉山)

★ 茨城県の高校入試で中学校からの内申書が変わるといふ事で論議をよんでいます。

・ 神奈川県ではア・テストをどう扱うのか、これから問題になるのではないかと思ひ、関心を持ちたいと思つて参加しました。

・ 茨城のように、学習への意欲や関心、態度、部活動の成績まで点数化されて、合否に影響するとしたら、今まで以上に生徒はのびのびと自分なりの目標をもつて学校生活を送ることはできなくなるでしょう。アテストの成績で選択する高校が決められてしまう現在のひどさ、それを上回るのではないかと反対です。

☆ 中学高校時代を千葉で過ごしたため、神奈川方式については殆ど知らなかつた。中学に進んだ子ども達から「中二の夏で高校が決まってしまう」と聞いていたが、自分たちの受験と比べてどうかとなると、もちろんより良く、最終的には理想に一步でも近付けることが望ましい。(千葉では、二年の終わり頃から毎月アチーブメントテストが行なわれ、受験は一回であるものの、進路は殆どこの結果で決めることになった。志望校の順位も出ていたので、業者テストだったと思う。)

・ 校風や独自の歴史によつて選べるなら自由に選択する意味もあるが、長い間のランク付けによつて各校に割りふられた子ども達が、その校風や歴史を作つてきているのだとしたらどうだろう。意



味がなければ、小中と同様、地域の高校として存在していくべきなのではないかと考えた。課題集中校の立場に立たれてのお話からそのことを強く感じた。

☆ 加藤先生がおっしゃった進路指導Ⅱ進学指導になってしまっているということに同感です。親であり教師である私には、自分はこういう生き方をしたいかを考えて進路を決めさせたい。だから高校に殆ど進んでしまう今の現実に納得できないでいます。勉強中心の高校の他に、実技や芸術中心の学校などがあってもよいと思うし、仕事を持つてもよいと考えているので、是非、教育の改革をもっと幅広く行なってほしいです。自分に自信と誇りを持てる生き方をさせたいと常に願っています。しかし、学力の低さを心の中では劣等感として持っているようです。自信を持って生きられる子ども達をつくる大きな改革を望みます。

☆①A・T体制、二、三年で廃止する方向で考えること。(小学区制とセットで) 加藤氏の発言に反対。硬直している。

②小学区を、一校とするのではなく、三校程度として学校を選択できる余地を残すこと。加藤氏の発言に反対。現在、高校三原則の小学区制は、三校程度で考えることが一般的になりつつある。

③学校内における選択制を豊かにする。黒沢氏の内容を具体的に検討したい。

④教職員の転勤を機械的にせず、企業努力ができるようにすること。同一校に二十年三十年いてもいいはずだ。教育は人間がやるので機械がするのではないから。ここまで含めて検討してほしい。

☆ 単位制高校は、中退問題の解決にならないと思う。系統的学習できない。担任をはじめ教師とのコミュニケーションが少ない。単位未習得により在籍者ばかりたまる。等間題点が多い。

・学区については、一学区五校くらいがよいだろう。小学区として一つの高校しか行けないとなると、その学校にはそれぞれの生徒に対応できるカリキュラムを用意するのに、破格の予算が必要と

なろう。現実的にはムリだろう。

・A・Tについては、たしかに学力検査によって十五の春を泣かせないということになるが、中学生にとっては、中二から大きなプレッシャーで、部活と学習でおいやられてしまうのではないか。今後も検討を要するだろう。

☆二年生でのア・テストは、あまりにも早すぎる。三年生後半にがんばろうとする子にとっては、劣等感をうえつけて、やる気をなくさせてしまう。アテストなし、入試だけでよい。

・百校の高校ができたので全員入学できるはず。定員割れや、私学との問題（約束など）よりも、教育予算を増やし、教員を増やしていったほしい。

・選抜方法をなくし、入学資格検査（基礎学力の）のみにして、地域の学校へ入学できるように（学区制）したい。

・大学の格差をなくさなければいけないのでは…。大学の改革から考えてほしい。東大に教育予算が集中しすぎている！

☆学級減、学区制の大切さを痛感しました。

・成熟したこの時代を支えていく、たくましくエリートも必要かと思えます。ただ、問題になっているエリート層は、人間として成長すべきあらゆる能力を切り捨てて、知識のつめこみのみ偏重しているのが問題だと思います。

・教育を改めて考える良い機会となりました。

☆子供の不登校など、精神的活動を助けるシステム「カウンセリング」のようなものが欠けているのではないか。個人の生涯学習のためには、その個々に適した教育を受ける権利があるのではないか。高校入試以前のカリキュラムの問題も大きいのではと改めて感じました。

☆・中学生、まだ十代前半の頃から、偏差値などを気にする子どもたち。まだ、人生のほんの少ししか経験していないのに、この時点で、自分のレベルを気にする。悪い所ばかりを気にするような今の学校の体制、入試のあり方をあらためるべきだと思います。ゆとりのある教育を、入試だけでなく、教科のカリキュラムから全ての点で、今改革が必要であるのだと思います。

☆・高校入試の格差序列、現状を具体的に解りました。ありがとうございます。

☆・学校間格差がもたらす問題点が明らかになった。

・小学区制が良いとは思うのだが、県民に混乱を起こさないで実現できるのだろうかと思う一面もあります。

・本音で語ったら、どの親もいい学校へという気持ちは捨てられるだろうか。

・学力で見ないで、その子の個性、特性を本当に正面から見られるのだろうか。

・意識改革が一部の人達でなく、成し得るのだろうか。

・自分自身の中で、様々な課題が明確になるような、今日のシンポジウムであり、感謝しております。

☆・社会の受け皿が変わらないかぎり、格差と序列は開くばかりだと思う。理想的な教育論だけが別世界で論じられても駄目だと思う。経済力の差が学力の差になっているという報告があったが、親は、子どもにはよりよい生活をと願っている。ではよりよいとはなんだろうと考えると、一つには経済力も大きいものであると思う。経済力を得るということは、現在ある程度の企業に就職し…ということになる。ある程度の企業に就職するために…となると、どこが学校…となる。なぜそうまでして義務教育でもないのに高校大学にやりたがるのか、それが社会の受け皿である以上、普通の親は望み普通の子は行くしかないのではないか。それが現在の日本の制度なのではないか。その上、

学校五日制のからみで、授業時間確保に四苦八苦している中で、十分な学力定着など、今の文部省のいう指導内容では計りようもないと思う。基礎学力の低下はますます開くものであると思う。今の文部省の考え方では、格差と序列も大きくなるだけだと思う。そこにメスを入れないがぎり一学校の努力だけでは改革は望めない。

・普通の子を持つ親の一人として、授業が正しく成立する（生活指導にあけてくれない）学校で学ばせたいと切望する。

☆・人を何らかの方法によって選別することは、常に問題が生じ、それを補う形で産業化（塾）して金もうけをする場、それに乗じて笑う者泣く者が生まれてくることは、必然的なことだろうと思っ

た。

・学校間格差は、中学高校の努力で解決できるものであるかは疑問である。

・家庭の教育力が崩壊したといつてよい程、幼い頃からの民間の教育にたよった教育がなされてい

る今日、自由競争による種々の格差や問題は、現状が続いていくような気がしてならない。

・家庭の教育について、渡辺さんの家族の結びつきや親子関係に胸をうたれるものがあつた。

☆・格差、序列とは何を意味するのか。個々の取り方により問題が大きく考えられるのではないか。

私は、学校格差、序列などは問題にならない。人間的価値、人間としての生き方を考える上で、一

部の物差しとしか考えられないからである。

・私が教育に望むものは、子供自身が持つ力を十分に伸ばしたいという事であり、学力が高まるこ

ととイコールではない。

・広義での教育について、大人が何を成すべきかの議論を続け、高めていきたいと思ひます。

☆・格差、序列の解消としての小学区および総合選抜制度？

小学区：学校間格差↓学校内格差↑子ども達に安らぎはあるか。

総合選抜：選択の自由がなくなる↓中学校の問題をそのまま高校に持ち上がるだけ

・なぜ、格差と序列があつてはいけないのか。このことで人間性まで問われることはない！

☆・学校間格差をなくしていく必要性を強く感じた。

・自分さえよければという感覚、人をおしのけてまでもという感覚。高校内で（課題集中校などの場合）多くの問題を一手に引き受けてしまうのでは問題解決も難しい。学力的な差はその生徒に依りて選択制をとって学習させたり、少人数の授業時間を取り入れたり工夫することによって解消できるのではないか。生徒指導面でも生徒と共に歩むことによつて、自己中心ではない人作りにもなるのではないか。エリート校や底辺校をなくすることが社会の正常な縮図を高校内に作り、成績だけが全てでないという多角的な考え方をみんなができるようになる道ではないか。

☆・参加するだけの意義を持った教師、父母の一般論がほとんどであり、現実の対応が少なかったように思われる。

・参加するだけの意識のない生徒や父兄のホンネは、できるだけ楽をして、できるだけりっぱな資格がほしいという所ではないでしょうか。

・現実に社会では、能力（学力だけではなく）によつて差があつてあたりまえである。それなのに高校だけ格差や序列をなくしても、なんらかの別の格差や序列が発生してしまうと思われる。それならば、最初から序列を明確にしてしまふか、又は逆に、どこの高校を出ても同じだけの能力を身につけていると言い切れるようにするしかないのではないのでしょうか。

☆・中高大の先生と主婦を混ぜてのシンポジウムは、いろいろな分野からの提案がありよく配慮されていると思う。

・ア・テストに関しても一長一短があるし、中学でも地域との関連ですでに学校間格差があるということから考えると、ア・テストも必要のように思う。

・高校の格差はやはり少しずつなくし、地域とのつながりのある、通学に時間のかからない地元の高校に入れるのが必要と思う。格差はないのがいいと思う。小中高一本化しておくのがいいとおもふ。そうすると、私大へエスカレーターで行ける高校に行ってしまうのだろうか。やはりむずかしい。でも、無理して高校に行かせなくともいいのか。もつと、働くということも大切なのか。

☆・中学高校家庭というそれぞれの場での現状がよくわかり、問題がたくさんあることもわかった。でもそれに対する対策は、これといったものが出なかったように思う。(単位制はなかなかいいと思っただが)

・制度をいろいろ変えるよりも、学力だけで人間の価値まで判断してしまうような意識を社会や私たちが改め、子どもたちにも改める指導をしていかなければいけないと思う。企業も、学歴で人を見ないようになってほしい。

・それから、学力の差と一口に言っても、それは生まれつきもっている能力の差だけではなく、環境が大きくかわっていると思う。本来力はもっているが、家庭や学校などで問題があつて、力を伸ばせなかった生徒も多いと思う。だから、学力だけで人を見るのはやはりおかしい。

☆・高校入試問題では、どのように選抜のための試験を無くすか、それが最も大切な所だと思ひます。  
・多様な入試といっても、それは序列選別の中でまき起こっている矛盾(学校間格差)をインペイスchoolに入ることができるでしょうか? 決してないと思ひます。

☆・約三十年ほど前に自分が高校受験した時の事を思い出しました。さんねんながら受験に失敗しま

した。その時から、自分は大きくなったら教師になると決めました。

・今、教師をやっていますが、息子が中三で受験の年。親として、何とか合格してほしいと思っています。ア・テストや序列などよりも、親バカでしょうか、合格した時の息子の笑顔を今から夢見ています。

★・私学の問題について、ぜひ論議を深めて下さい。小さな子どもたちにとって非常に大きな問題となっているのが現実です。待ってられない状況です。

☆・「学校選択の自由」の余地は、運動を当面すすめる上でのリアリティの獲得の手段として存在するか、それともそのこと自体、この市場社会が前提とされる社会においては、残らざるを得ない存在としてあるのか。より積極的に言えば「学校選択の自由」の概念の中に、新しい運動や社会を展望していく因子があるのか考えてみたい。

☆・シンポジストのそれぞれのお考え、活躍は大変頭の下がるものがありました。

・入試制度は、永遠に普遍的なものが見つかることはありませんが、公教育なら教育の必要性を認めない人はいないわけですから、格差云々問題もよいのですが、さらに大きな視点で四十人学級→二十人学級→などきめ細かい教育方法の改善の方に力を入れてほしいと思います。

・教育シンポジウムのテーマとして入試にしほった点では致し方ないと思いますが、視点の違いをだいぶ感じました。(浜教組港北支部茅ヶ崎分会 関戸)

☆・子どもたちは高校入試、大学入試に苦しめられています。入試に苦しめられるのではなく、どう生きるべきかということ、この大切な時期に人生の先を生きている教師に導かれて考えさせてやりたいと思います。

・今日はとても楽しい有意義な話を聞くことができました。この運動を市民全体に広めて、ぜひ改

革の力にしていってほしいと思います。

☆ 興味深く話が聞けた。神奈川の入試制度には善し悪しがある。輪切りになってしまいう選択はまずいなと思いつながら、意識の改革ができないかぎり今の状態が続くのだろう。残念である。

☆ 高校受験については、希望者全員が入学できるようなシステムが実現すればいいと思っています。方法論については、本討論会で少し出たように思います。

・保護者の方の意見が印象に残りました。

・教員は子供達にやはり夢を与えるのでなければなりません。

☆ Life style の一元的な価値観の是正、しかも保護者、教職員、社会一体となった県民合意の上での取り組みが必要だろう。

・格差と序列化も根源の問題と言えらるうが、その背景にある意識価値改革も大切だと考えます。  
・神教組を中心とした新しい神奈川の教育を生み出すべく、県民ぐるみの運動展開を期待したい。

・勉強させていただきました。ありがとうございます。

☆ 確かに「べき論」から抜け出せないことは、自分を含め感じられる。

・具体的な方向性、筋道を考えていきたい。

・他県の改革（上からでなく下からの）を知りたいと思います。

☆ 大変意義あるシンポジウムだったと思います。今後も精力的にこのようなシンポジウムを広く行うべきだと思います。

・学区問題については、長州県政のうちに何らかの方向性を県教委として出させるべきだと思います。神教組、神高教、県連合も巻き込んだ運動を展開すべきだと思います。

・ことは人間の本質や欲望に関するもので、多々困難が予想されますが、がんばっていただきたい



と思います。

☆・初めて参加したが有益であった。各人の発言も簡潔であった。

・三回目は是非高校のナンバースクールの教師、県教委(行政)、生徒の代表も加え多面的に掘り下げてほしい。日本の教育の課題に迫るシンポジウムに育ってほしい。

・父母や民間の方の発言をもう少しとってほしかった。県の騒然たる教育議論(長州県政)に対する教文研の運動であってほしい。

☆・いろいろな立場の人の意見、思いなどを聞いて参考になりました。

・大学入試についてもシンポジウムを開いてください。

・企業の採用のしかたから変えていかないとどうにもならないのでは…。

☆・シンポジストの話を十分理解していない点で申すところですが、本日の「神奈川の入試制度を問う」のテーマにあるように「神奈川」の入試制を浮きぼりにした討論でないところが残念。

・日本の教育制度、入試制度、日本の高校の序列、一般論でなく、ア・テスト(神奈川方式の一手立て)等、神奈川の入試にもう少し焦点を当て時間をかけてほしかった。

☆・シンポジストの話がとても具体的でわかりやすく、良かったです。討論の内容にも現実をふまえての意見でした。

・このような集会を教師だけでなくもっともっと広めて、今の日本の多くの考え方を変えていく必要性を感じました。

☆・今日のテーマは奥深い問題を含んでいるが、いろいろな方々の考え方を聞いて、とても参考になった。

・大勢の子供達が充実した高校生活を送れるようにするために、現在の状況を少しでも改善してい

くための方法を見つけたす糸口がほんの少しだけ見つかったような気がする。

☆・大変関心もあり問題を感じます。引き続きやっていって戴きたいと思えます。

☆・大変よい企画だと思います。これからも多く行って下さい。ありがとうございました。

☆・障害児教育関係のシンポジウムを希望します。

☆・有意義な話でした。

・少し時間が長すぎるのでは？

☆・会場の参加者のお母さんの「よい授業をして欲しい」という意見に、共感を覚えました。

☆・このような催しを積み重ねていくしかない。いろいろな場で、いろいろな機会で。

・地元の中学と高校の教師で事前に生徒を配分できないだろうか。

註：★印のところでは多少の分類……：親・一般・小学校教師・中学校教師・高校教師など筆者がわかる範囲で、その後はおおまかなテーマ別、シンポへの要望などの順にしました。☆印が一人分の意見です。

第四回教文研教育シンポジウム記録

**神奈川の入試制度を問う**

— 中学の進路指導と高校の序列をめぐる —

1994年3月1日

発行：神奈川県教育文化研究所  
横浜市西区藤棚町2-197  
神奈川県教育会館内  
☎ 045-241-3531

印刷：(有)神奈川教育企画  
☎ 045-253-3435

**KYOBUNKEN**